

翻刻 『本朝斑女箋』

翻刻の会

一、底本には刷りが比較的良好と思われる、早稲田大学演劇博物館所蔵の七行九十六丁本(二一一〇—二四六)を用いた。

作者 為永太郎兵衛

奥書 豊竹越前少掾

版元 西沢九左衛門(底本では「九左衛門」が破損)

丁付 「斑 一」 「斑 九十六終」

上演 寛保元年(一七四一)三月四日大坂豊竹座初演

二、底本を忠実に翻刻することを原則としたが、次のような校訂方針に拠った。

1 本文は文字譜を手掛かりにして、適宜改行を施した。ただし、道行・景事の類等では改行しなかった。

2 各丁の表・裏の終わりは、丁数の数字とオ・ウの略号を()で示した。

3 仮名は現行の字体に統一した。ただし、感動詞、送り仮名、捨て仮名の類以外の、本文中の「ニ」「ハ」「ミ」は

「に」「は」「み」とした。

4 漢字は、一部の異体字を除いては、原則として通行の字体に統一した。

5 漢字・仮名ともに、誤字、脱字、当て字、仮名違い、清濁は底本の通りとした。

6 特殊な略体、草体、合字等は現行の表記に改めた。

7 疊字は、平仮名は「、」、片仮名は「、」、漢字は「々」に統一した。ただし、「く」はそのまま残した。

8 文字譜の類はすべて採用し、本文の右傍の適切と思われる位置に翻字した。

9 底本の不明箇所は適宜同板の他本で補ったが、特に断らなかつた。

三、本文の翻刻は、次に掲げる翻刻の会(学部学生の研究会)の会員によってなされた。

清水唯由、砂山由起江、山崎薫子、米澤 史。

文字譜、改行、本文の最終確認は山田和人が担当した。

なお、早稲田大学演劇博物館には、翻刻の許可を御快諾いただきました。記して感謝申し上げます。

(山田和人)

本朝斑女箋

作者 為永太郎兵衛

翠帳紅闇に。枕ならぶる床のうへ。馴し衾の夜すがらも同穴の跡夢とのみ。美濃の国野上の花街に滞留ある。吉田の少将惟貞卿。陸奥の国の任終り。帰洛の日取過行ど。爰に数日の御遊興。烏帽子にかはる置頭巾花紫の色ふかく。全盛花

麗の御ン物ずき。大々尽と名に高きへ里に威光ぞ。か、やけり。

いで其比は堀河院。寛治元年二月末つかた。春の糸遊のどやかに。柳桜をこきませて（一オ）梅の匂ひを移すなる。

花子斑女の大夫職左右に冊奉れば。一家の女郎引舟も。皆それくの位山。禿搗手に至る迄粧ひ飾り居ながれて昼夜

御きげんとりくも也。

わけて主の長が答拜。袴ため付け恭しく。三方に扇を載て立出れば。花子が母の濊町。案上に短冊取りのせ目八分。いづれも御前になをしおく。

少将見給ひヤア旁。我れ先年奥州下の折から。此野上の宿に数日の逗留。昨日けふの様に思ひしが。早十二年の春秋を陸奥にくらし。此度の上洛又も爰に立寄しに。風流優美の此程の饗応に引かへ。何か願と有つてかたづまつたるけふの趣

向。いぶかし（一ウ）さよと有ければ。

長ははつと頭をさげ。先年君。陸奥へ御シ下向の時。斑女といへる名によせて記念に給はつたる扇。又もやあふぎのいかいもなく。此度はすさめられて御シ側近く召れぬを歎き。扇をもつて閨の中ちに引こもり人に面を合さず。只とこやみの晴間なき。心をさつしお佐のため。御前へ召つれ候と恐れ入つて述べ

斑女御前もさしよつて。ノフ曲もない我君。せめてお心打明て何が誤何が科と。たつた一ト言おつしやつて下さんせと。
託願へは花子のまへ憚なく。自ゆへに姉女郎の斑女さんを。秋の扇と人はいはる、悲しさはいか計り。古郷より母の
迎に見へしを幸。此身に暇を給はれと申上れば母は御前に打(二オ)向ひ。御寵愛娘一人に止り。数日都へ帰り給は
ねば。禁裏おもてへの聞へはどう有ふと思し召ス。此野上はかねて君に恨ある。高階の右大将親平の領分。もし御大事
に及び。花子ゆへじやと人はいはれなば。わたしら親子が心すまぬ其訳は。もと吉田の御家来と。いふをせいしてコレか、
さん。それを爰でいはんす事かいな。此程より御暇給はれと願ふは。第一は君の御為。斑女様への義理も有り。都にまし
ます御本妻桔梗の前様へ義理を立てると。申は恐れおほひ事ながら。いふにいはいはれぬわたしが心名残おしいは山々なれど。
好んで別る、心の悲しさ。一首の歌にと計りにて打しほるれば。少将殿短冊を取上ケ。浅からぬ契も今は等閑に。いかに成
行身の別(二ウ)かも吟じかへし詠かへし。扱は花子が此儘爰に有りたきも。かなたこなたの義理にせまつてあかぬ中の
暇を願ふよな。又某が斑女を見捨し其子細は。十二年いぜん都にて。妻の桔梗の前は梅若といふ男子をもふく。産顔を
見るや見ず。勅命によつて奥州へ任国の折から。此所に逗留してあの斑女に馴初しが。其月より懐妊せしと聞キし計り。
其後人の噂には斑女は男子を設しといへ共。陸奥へは告しらす。けふの今迄我子の行衛をふかく隠す不届もの。幾度
いふても叶はぬ願いと。つれなき仰に野上の長。其儀についての御不興なれば。此長が申訳。太夫職の斑女御前の設
られし若君なれば。松の位をかたどりて松若様と私めが(三オ)名付親。それを廓の悪口仲間が申には。吉田のお家は天
満宮を御信仰有によつて。御惣領を梅若様と申スは聞へたが。斑女の産れし子を松若殿と号しは。御本妻腹の。梅はちる

共松は常盤の齡をたもち。お家を我子につがせん巧と人の譏を気毒がり。七夜の内より松若様を里にやられ。御行衛がしれざれば。申訳もなき仕合せと。いひもあへぬに下々の紛のごとく。里にやり在家がしれぬとて其まゝに捨置かと。御気色かはつて見へければ。

斑女は涙にかきくれて里にやりし其さきは。あれなる長の弟野上の藤太と申すもの。わらはが引舟とつれ立のき。今はいづくに夫婦に成っている共しれず。十一年が其間。(三ウ)松若君の行衛のしれぬはわたしが誤。数ならぬ身に設しお子を。先程迄御太切に思し召て給はる。君が心の。有難さよ。

斑女が心底聞うへはしいて不届共いひがたし去ながら。松若が行衛しれる迄は都へ供は叶ふまじと。料紙硯の筆くいしめし。雲隠の月を画し此扇の裏に今又花夕白を書きそへて。斑女におくる記念ぞや。

いかにもして松若にあひに扇を手ふる。末のちぎりを待ッべしとたびければ。

一座の傾城口々に。今遊した扇の絵が夕白なりや。つい晩かたに若君の。お顔見さんす瑞想と。悦びさめく折からに。都より御台所口。お使者として。執権松井の兵衛重俊參上と披露して。すつと出たる異形の出立チ。簀笠に高履草(四

オ)刈鎌を携へて。御前も人目も憚る色なく立ッたる有様。一座の人々興さめ。てこそ見へにけれ。

ヤア老に老たか松井の兵衛。此少将が目通り共憚らず。異なる姿慮外千万。誰か有ル。あれ引立よと以の外なる御ン忿。

ホ、此松井の兵衛を老にほれしと。御覧有はあきしい眼。酒色の外はなんにも見へぬか情なや。誠に蔵を侮るものは盗賊に教へ。邪気は虚に乗じて入理り。君奥州にましますを幸イ。高階の右大将親平が。讒言日々に募共。御舅參議忠

通卿。是迄は禁庭の首尾。取繕ひ給ふといへ共。中々忍びず。最早此たびが破れ口と相見へたり。コレ。御台所梅若君御親しの物思ひ。家来の拙者迄肝をけづる口惜さ。御いけん申御供し（四ウ）て。都へ帰らんと来て見れば。右大将が詞に違はぬ其御身持子。先年此宿にて。まつ此ごとき御放埒を。粉源五が数度の諫言。御用ひなきによつて御目通りに腹切て相果し。彼が死骸を当所中山に葬り。傾城斑女とやらんが一字を建立有しより。斑女堂と名高く。世の人言に源五が忠節。斑女が情をいふ度に。こなたの身持放埒の取さた。京童の仇口のはに。か、り給ふとしろし召れぬ愚さよ。たつた今右大将が讒言にて。代々に伝る吉田の佳名。都北白河の御館は。青草しげつて狐狸の栖とならん。浅ましや。コレ。其時の草刈鎌。簑は則チ美濃の国。此野上の取さた天が下にひろまる共。防は此笠此兵衛が。（五オ）形に顕はす異見は是切り。サア後共いはさぬ。今さつぱりと御心を改られ。上洛有れば重畳。承引なければ此鎌で腹十文字にかつさはさ。憂つらさめを見ぬ覚悟。サアく返答承らふ早く聞ふと詰寄く。詞を尽し理を尽し怒つ泣つ諫れば。少将はつと理にふくし。今に始ぬ其方父子が諫言。用ひざるは我しながら酒狂とやいはん。禽獸にも劣し身のうへ。是なる二人の遊君に迷はぬ證據。斑女は此ま、野上の長に預おく。花子は一首の歌の心を感じ。母が願いに任せ暇をとらず。早々古郷へ帰るべし。某も是より上洛取急ん。兵衛はささへ都に帰り。桔梗の前。粉梅若にも此趣を告しらせよ。ハ、はつと計りに松井の兵衛。頗あたまを（五ウ）地にすり付。悦び涙諸共に。早御暇と立出れば。花子親しも打つれて。古郷へ帰る名残の袖。右と左に嬉しさと。悲しさこめし憂別れ。跡に残れど斑女は君に。別れ悲しさ記念の扇手にふれて。我子の行衛尋扇の末長く。長門宮の裏に籠し秋の扇の色ふかき。例は異国本朝の。斑女が簀。

是なれや君が。情ぞ三重へ名にしあふ。

月こそ洩ね板庇。不破の関所を固しは。当国の領主高階の右大将親平の家臣。高の武者之介義隆。関が原の半途より。

中山の手に乱林高垣兵具ひつしと立並べ。遠見斥候の諸役人。眼をくばつて扣しは。事厳重に見へにける。

醒井の本陣より右大将の執権。内記左衛門氏廣けらい引連入り来れば。(六オ)武者之介出向ひ。暮に及んであはた、しき

体何故に来られしぞ。さればく。兼て貴殿も存の通り主君右大将は。少将の御台桔梗の前に。御執心より発つて確執と

成此度少将都へ帰るさ。野上の里にて遊興奢。放埒の身持を禁庭へ奏聞有しに。阿房払にせよとの勅諭を幸いに。彼が

旅宿柏原へ押よせ。少将を亡す思し立ちなれ共。もし討もらさは奥州の方へ落行クまい物でなし。此不破の関にて討とれ

との仰によつて来たり。其儀は此武者之介一人承つても防んに。貴殿を加勢に給はる事。もし少将に志有て。見遁す

べきかと御疑か、りしな。こは我君共覚ぬ仰。某は幼少より父母の手を放れ。主君の(六ウ)御恵にて成長。則チ高階

の一字を給はり。高の武者之介と。名乗ほどの御厚恩いかでか忘ん。少将を讒言なさるゝを。是迄お諫申したは皆君の御

為。良薬口に苦き喩。却て御疑を蒙りしは我不運。あはれ少将此所へにげ来らは。召とつて二心なき證據を

頭さん。先々貴殿は遠路の勞。暫休足有べしと打つれ役所に入にけり。

住馴し野上の里を。柏原まで送り道。古郷へ帰る傾城花子母の濊町打連して。関所間近く立とまり。コレ娘。

ちと嗜めや。そなたは古郷へ帰るといふて。少将様に暇乞迄してべんくと跡を追イ。付まとやる程お為にならぬ。サア。

そりやよふ合点してぬれど。放れともないが因果。(七オ)もきどうなおまへにせつかれ。いひ残した事も有り。ま一どお

顔がヲ、嬉しやそれそこへ。見へるくと夕間暮。いそがせ給ふ少将惟貞。じゆりん合羽に大小よこたへ。人目を忍ぶ旅人の風俗。

テモ扱もお前も未練な。爰迄したふて御出かいの。今も今とて此娘に。ホウ異見かそりや皆尤。そこで我等も。ふつつり思ひ切て都へのぼる。名残にちよつと顔見に来たとの給ふ所へ。ふだいの家来岡崎金吾まつ黒に成つてかけ来り。扱も我君野上にて。御放埒の御身持チ天聴に達し。急ぎ追討有べしとの勅詔を蒙り。右大将親平。只今柏原の本陣へ押よせ候故。朋輩鳴川宇内を。君の代に残し置。多勢を切ぬけ是迄(七ウ)参上。とく何ッ方へも御立のき有て然るべう候と大息ついでうつたふ。訴れば。

花子濛町はつと仰天。少将も驚き給ひ。扱は松井の兵衛がいひしに違はず。右大将が兼ての讒言よな。かく成くたれば最早都へは帰られず。一ト先奥州へ立退ん。汝は是よりすぐ京の館へ馳着。桔梗の前梅若へ此通りをいひ聞せよ。早くくととの仰に。はつと打つたつ金吾飛フがごとくに急行。

少将重てコレ兩人。由縁ある国なれば。是より奥州へ下らんとは思へ共。気毒は此ふはの関。右大将か家来武者之介が固たれば。輒く通る事叶ふまじ。いかゞはせんとの給へは花子はつと心付。よい事が有お気つかひ遊ばすな。其武者之介が家来。川隈甚平といふ者。わたしが野上に(八オ)勤て居る時。たびく文を越たれ共。ついに返事もせなんだが是幸イ。口でちよつぽりだましてどうぞ。通しませんと関所の内を。うかゞへは。

甚平も油さし行燈にかゝり透し見て。ヤアそちや花子じやないか。昨日此関を通りしが今野上へいぬるのか。見ればくさり

合つた男連。うまいなく。ヲ、めつそふな事いはしやんせ。跡なは兄様。こちらはか、様。連立つて国へいぬはいな。明日此関を通ればよけれど。急な事故どうぞおまへを頼んで。通してもらをと思ふてきやんした。ほんの情じやはいな。イヤは花子。情といふ事見し事知つてか。エ、あたどうよくな。サ、サ、其時は皆わしが悪かつた。是拜ます。ム、堪忍してくれか。そして今通してやつたら。ハアテ此身はどうなりと。おまへ（八ウ）に任すと手を取て。じつとしめれはラ、こりやたまらぬ。扱はぞつこんきおつたな。氣遣しやんな通す。夜更人しづまつて何ぞ相図がヲ、それよ。おれが曰外やつた文に。歌が有ルそれ覚てか。ホンニ其文に書いて有たが。餘り大事にかけて。つい梳紙にしてのけた。ホ、ウこりや尤。読だ跡が役に立てまあ嬉しい。そんならま一度いふてきかそ。不破の関。朝こへゆけば霞たつ。野上の方に驚ぞなく。覚やつたか。是にどうなと節付ていふたがよい。マアそれ迄向の辻堂に待つて居て。よい時分にふはの関。アイ。合点でござんすと。別れて三人急き行。跡見送つて甚平は関所の内へ入にけり。

折節風に誘れて。耳を突ぬく鯨波。乱調に打つ鉦太鼓ほらの（九オ）響に驚く内記。つづいて欠出る武者之介。ア、ラ心得ず。三声宮の音に入れば味方の勝利なき道理。ハレ、心もとなしいか、はせんと氣をもむ折節。

右大将の使として。犬上平馬あわた、敷かけ来り。コレく内記武者之介。只今主君右大将。柏原の宿に押よせ。少将惟貞討とり給ふといへ共。数多の家来が死物狂今戦ひまつ最中。猶も関所をさしかため。残党きたらは一々に討とられよ。我レは是より引かへし。敵の多勢を防がんとひ捨てかけり行。

ア、レ聞れたか武者之介。少将を討とられしとは先ッ安堵。コリヤ、家来共。弥氣を付木戸を固よ。イザ、こなたへと打連れて入ルさ

の月も。更渡鐘につれたつ三人連し。時分はよしと花子は関所（九ウ）に立寄て。不破の関。朝こへ行ケば霞たつ。野上のかたに。鶯ぞなく。鶯合点と甚平がさし足ぬき足行燈の灯火。ふつと吹消まつくらやみ。

さぐりよつて木戸押ひらは少将濞町。足のふみとも危きせごし。なんなく通ればつ、いて花子。行をちらりと武者之介。見付けた女め遁さぬと。飛か、つてたぶさ髪。引ケと逃るがとたんの拍子。手に残ったは櫛かんざしなむ三宝にがせしと。追ツかけ行ケを甚平木戸口ぴつしやりさすを。後げさに内記が早業。

たまぎる声に家来共。差出す火影に見て恠り。ヤアうぬは甚平。コレ武者之介。御辺が家来今の歌を相図に。此関を通せしは疑もなき少将。サア真直に白状と。（十オ）せちがふ内に息絶れば。詮義の種も内記が不審。武者之介は忙然とあきれ果たる折こそ有し。

まちかく聞ゆる轡の音ト。逸栗毛に打跨り蒐上げたつる右大将親平。くらかさにつ、立ヤア二人り。今柏原の宿におしよせ。少将と心へ討つたるは家来鳴川宇内。似者を拵おき。落失たる惟貞。此道ならで行べき方なし召捕たるか何んとくど。せきにせけば内記左衛門扱こそく。たつた今女が相図で此関を通せしは。武者之介が家来甚平。落行キしは大かた少将と。聞タより親平くはつとせき上。ヤイ武者之介。日比儻が諫言たて。少将に。志有ル事明白。イヤそれはお情なし。既に女を引つとらへし時。手に残たる櫛簪。是竟なき證據といはせも立ずヤアくらい（十ウ）く。関破りの女めを。さがし出す迄櫛簪。あたまにさし。面恥さらすがよいこらしめ。勘当じや立ツてうせふ。ヤア内記左衛門。汝はいよく此関にとまり厳しく固よ。我は是より都へ押よせ少将が妻。桔梗の前を奪取り。一家残らずばつ払はん者共つげと駒

に鞭。打立てこそ急ぎ行。

跡見送つて武者之介。ヲ、御憤尤く。此上は我カ根限り。関破りの不敵女。にげ隠る、共天地の間尋出さて置べきかと。取上ケ持し櫛簪。さして行衛はいづく共しらぬ山路を三重へしたひ行。

花鳥の。都の春を。徒に。吉田の少将惟貞卿の御台所。桔梗の前は十年餘りの御留主住居。北白河の本所には。早近カ々に御帰洛とて。待間もとけし長廊下。お傍つかひの姫。共寄集り。けふは若殿（十一才）梅若様。御家老の兵衛殿を

お供につれられ。御父少将様早ふ御帰洛なさる、様にとの。御願にて北野の社へ御参詣。それ共思し召ぬ殿様。美濃の国野上の廓の二人りの傾城。斑女花子の色に迷ひ。お帰り延引するを幸いに。高階の右大将殿の大内表への讒言。どうでも根の有ル事とは思やらぬか。ハテしれた事。御台所桔梗の前様。此館へ嫁なされぬ先キから右大将殿のほれて。こちらの殿様に恋を仕ました腹立。十二年ふりにはらすのじやはいの。少将様奥州へお下りの時。御誕生の梅若丸様。ことし十二にお成りなさる、迄。親子御の御対面さへ遊さぬ。殿様のお居ぐさりもよつほど。そなたのいやる通り。追付御帰洛なされたら。御台様にもお久しぶり。其上に斑女花子三人の手に。きりくくもまれ（十一ウ）もまる、三目錐の少将様。惟貞ではないは強様じやと。いふといのふと。遠慮もなげな高咄し。ヤレはしたない旁。夫の少将殿野上の宿に御逗留なさる、を。斑女花子の色に迷ひ給ふと。あしさまな取沙汰は皆わらはが従弟。右大将殿の巧。最早君の御留守迎も今少。随分物事ひそやかにと制しおはする折からに。

御台の御父参議忠通卿。一家の館案内に及す。玄関よりしづくと入せ給へは。桔梗の前褥をささがり。是はく御老体

の切々の留守見舞。御くらう様やと挨拶あれは。ヲ、十二年の長の留主も今少し。それに付き。ちとおことに密々一大事を語りたしとあたりを見廻し給ふにぞ。コリヤく秘共。梅若兵衛の帰を待受ケ知せよと。女中を残らず勝手手（十二才）た、せ。一大事とはいか成ル御事。心元なふ存じますと尋給へは。ヤア桔梗の前。おことが幼少より。従弟の右大将に。終に対面させた事はなけれ共。見ぬ恋に執心とて少将に妻しを憤り。彼が多年の巧にて。野上の宿に此度の逗留を。以の外なる越度に取なし讒奏して。則チ右大将討手を蒙り向ふたり。エ、すりや我夫は。ヲ、まだしも運に叶ひ。落延しとは聞ケ共心元トなく。某懇意の公卿を頼み歌枕一見の願イをたて。智少将の行衛を尋んと思イ立暇乞に来つたり。又逢迄の父が形見と頗の髻ふつつと切て渡し給へは。桔梗の前は涙と共に押戴き。いかに髻の為じやとて餘りな思し切。ヤア歎くは愚。あれなる柳の一ト木を見よ。春の気色（十二才）の若やかに緑の髪としげれ共。秋吹風に散はつる心を直に我法名。柳葉居士と改めて諸国を廻り。聲に力ヲを添ん事方寸の内に有り。それに付き江州高島郡の与惣といふ獵師。元トは奥村前司といふ武士の舩にて。才智有ル若者。折々右大将か招くといへ共。不道の主には仕へじと貧しき世渡り。何とぞ彼レを松井の兵衛が養子とせば。吉田の家相続の基と思ひ。最前より其与惣を玄関に待せ置イたり。ハアそれは何よりお嬉しや。家の為と有からは。自らも対面し。兵衛の養子にす、めませふ。ヲ、然らばこちへと柳葉居士も諸共に。打つれ玄関に出給ふ。折から御館の。築地の外北野より御下向ある梅若丸。ことし十二の荅の花お供は（十三才）老木の松井の兵衛。刀取持チ引そふて立帰る。

跡よりしたひくる男小腰かめて申く。憚ながら此お館の公達。梅若様と見奉り。ひそかにお願イ申上度キ事有と搦手で

か、れば。ヤアこいつ軽はずみな。御訴詔あらはお館へ参つて申上いさ。イヤなふ兵衛願いと有レは途中とて聞キ捨がたし。まあそちは何者ぞと。仰にはつと頭をさげ。私めは山田の三郎と申もの。御父少将さま御寵愛の傾城。斑女殿の腹に誕生なされた松若丸様を。薬の上より預りかくまひまして最早十一才にお成りなさる。御器量といひ恰好物ごし。丁とお前に其儘。索性たゞしき吉田のお家の若君様。いつがいつ迄埋木の御住居させまするもいたはしし。松若様も親御様兄君に（十三ウ）御対面なされたきお願いにて近江一国の神々様へ御祈願の絵馬奉納。今日はお家の御信仰北野天神宮へ。私を代参に立られし所に。梅若様と見受ヶ是迄参上。御台様へ此通りを。仰上られ下さりませい御からう様。お取なし偏に願上ますと。詞遣イも詔ぬ。真実心の願イ也。

始終を聞て松井の兵衛。扱は今日宝前にて。梅若君のお傍へ落たりし絵馬に。願主吉田の松若丸と有しをふしぎと思ひしが。今山田の三郎か物語りを承れば。紛もなき君の御弟。天満宮の御引合せの梅と松。連枝の両若君はやく御対面有レかしと申上れば。兵衛のいやる通り。弟松若の在家のしれしは神の告。母様へ申上都へ入部を取急ぎ。対面遂たき物なれ共。父上には（十四才）御病氣とて野上の宿に御滞留ましますを右大将の讒言。遁る、は天満宮の御利生と。参詣したればこそ山田の三郎に廻り合たれ。父の帰洛なさる、迄ッ兵衛と有ければ。

ア、いかにも。事騒しき折からなれば。松若様の御入部は延引なさる、共。忠義ふかき山田の三郎。武士に取立つかはされよと。心を付ければ梅若君。けふよりは三郎我家来と成。弥弟松若を等閑なふ養育頼む。主従の印シにはそれ兵衛。其一振をと仰にはつと。金作の御佩帯渡せは三郎押戴。身に餘ッたる御賜。梅若様の御けらいに成たる様子。松若

様を始め女房や姑しよめに悦よろこはせたふござります早はやお暇ひまと。一いち札はらふのぶれは。

ヲ、追付御親子御兄弟お揃そろいなされて御対たい（十四ウ）面。其時傍輩はなはだち因ゆゑの参会まゐりあひそれ迄まは。先まさらばと松井の兵衛。梅若君の御供申表門まへへと別わかレ行。

此頃都みやこに徘徊はぐはぐする。名なに奥州の駒太郎。名なに鳥の鬼四郎とて人買仲間の口利共。酒さげんの衛足。

三郎さんろうにへつたり行合。コリヤ山三ぶか。ホイ又出合であひたかい。二人ふたりり共にうまいめに合あつたかしてまつかいてるはく。イヤこりやごうがわいて吞のだのじや。此四五日はふのわるい猫の子にも出くはさぬ。世間よかんにがき共ともを大事だいじにかけるか昼中ひるでもへちまはぬ。わぬしもけふは孫三じやそふな。素手すてふつていなふよりつれていなぬかい。やつれていねとは何なにの事。ハテこちと二人ふたりりは吞のすへて脚すねがた、ぬ。太義たぎながら肩かたにかけていんてくれ。ヲそりや安いやすい（十五オ）こつちやが。しる通りおりや雀とり目めもふ日のくれるに間まかなければ。うちつて居りや結句けつぐわいらが世話せわに成なル。そこらでぐつと一トねいり。酔よさまして跡あとからこいと。とつかは急いそぎ立帰たてかへる。

エ、身勝手がってなやつじやないか。ナア駒四郎。ハアもふ寝ねおつた。さらば我らもやつころりと。脚打すねもたせ高軒たかね前後ぜんごもしらずふしければ。

表おもて玄関げんかんに人音あしおと、登こてん奥御殿おくごてんへにげ込こムは。近江おんのふな売り高島たかしまノ与惣よそう。跡あとを慕したふて御台若君兵衛もつゞいて追おかけ出で。コレくと与惣よそう。いかほど辞退じたい召まつても。参議忠通卿の御さしづ。是非ぜひ身みが子分こぶんにせねは。ア、是兵衛様めつそふな事御意ごいなされな。

私わたくしめは野上の傾城斑女かやまが兄あにでござりますはいの。ヤア斑女御前の兄あにだと聞きケば。お家いへへ（十五ウ）対たいしてゆかりも有あ。松井が

御広間の刀掛なる大小取て渡せば。はつと押戴き腰に流石の侍姿。今日只今親兵衛に譲受たる執権職。松井の源五兼俊御目みへと。厚き礼義に人々は悲しき中の御悦の時しも有し。

館の四面(十七才)人馬数多の物音に。兵衛心へ御台若君奥へ伴ひ奉れば。門前に駒乗捨右大将親平。跡にひつそふ大上平馬其外雑人あまた引ぐしどつと込入。ヤアく吉田一家の奴原。宣旨成ぞ慥に聞ケ。少将惟貞酒色に溺れ虚病を構へ。禁庭へ恐れざる不行跡其罪科軽からず。我カ領内江州柏原にて討取べきを。逐電せし重罪大内裏は。願イも訴訟も叶ぬ様に此親平がしておいた。急ぎ梅若が首打て。桔梗の前を渡せくと呼びける。

まじと。いふ顔見るより犬上平馬。ヤアうぬは主君の領国高島の与惣じやな。某を上使として。度々我君の召る、(十七ウ)には辞退ひろいで。松井の源五と名乗ルからは。松井の兵衛が。ヲ、養子にたつた今成上りの執権職。お相人に望なら。身不肖ながらと尻引からげ。ぐつと踏出す足のふしくれ。りくんだ松井が継木の根強さ生ぬいたるがごとく也。

下知に随ひ雑人共拔連く。切てか、れは抜キ合せ群る大勢事共せず。太刀打チ足取り身のひらき。なぎ立く表の方へおつかけたり。

兵衛はよき間と梅若君を前載に伴ひ出。やうすは一ト間で申せし通り。是なる見越しの柳をつたふて。北野の杜へ御立退と抱上れば。せきのぼる気のおみども覚ぬ足取に。ヤレくあぶ(十八才)ない静にと。いふ間に平馬が引かへせは。ぱつし

く〜と切合い〜おふて行。

柳の梢に若君はこはさ悲しき身もふるはれ。塀の外へとなびきたる。枝にうつればしいわりしはく〜ぼつきり折し。下へおつれば夢の胴骨ふみおこされて人買共。コリヤ何んじやいと起上り。ヒヤア天から降たか結構な代物じやと。ひんだかゆれは梅若丸。ヤレ見のがしてにがしてくれと。悶給ふを猿轡しつかとはませ。コリヤ幸いな柳の一ト枝。是でおてば代物に疵がつかぬ。そふじやく〜とぼつ立引立帰りしは無慙といふも余り有り。

かくとはいざや白書院より切結び出る松井の兵衛。数ヶ所の深手老の身の尻居にまろぶを。起しも立ず平馬がいらつて切付る。遙に御台は走寄待つて〜と支給ふを。ヤア（十八ウ）主人の恋人怪我なされたと引のけ〜。既に危き後へ源五取てかへしてどうど打すへ足下に踏付。コリヤ右大将がてがいの犬上。我父の息ある内。自身に敵を討せまするか責ても御腹いせと。平馬が両手を後へぐつと折わけ。御存分にとさし付れは。すつ込ム首をすつぽんと切も切たり末期の手際。

ヲ、よくぞ遊したり扱。梅若様はいづかたにと深手の父をいたはれは。源五。梅若君は先達て北野へ落し参らせた。我事は打やつて。御台所を伴ひ片時も早く若君に追付キ。主君少将殿に何とぞ廻り奥州へ。一ト先御供仕れ。是に付ても思へばはかなや。たつた今親子と成りすぐに別る、薄き縁。先きだつ父への孝行には御主（十九オ）人達の御事を。頼む〜といふ声も。頼ずくなき老木の花ちりて空しく成ければ。はつと主従三世と一世も縁の契り。会者定離とはいへ共ほいなき別やと。涙にむせぶ折こそあれ。弱みへ付込ム捕人の雑人。アレ鮎売めが隣にあふた体なるぞ。く、し上て毒氣吐し桔梗の前を

奪取り。親平公へ差上手柄にせんとてんでに懺積。向掩に群る大勢風に木の葉の侍供。骸は飛石手水鉢打つけく。
塵。

けころし蹴飛ばしよせくる雑人又むらく。ちりくはつとほつ払ひ。御台を伴ひ出て行。水の流や定なき。北白川の危き御所を。遁れく。忠信義士の道すぐに陸奥。さして急ける(十九ウ)

第二

庵崎や隅田川原を。いつの間に賽の川原と迷ひ子を。やつさにかける贗盗仲間。子買くと群りて。どの子がほしいこりやなんぼ。いくら共なき人の子を。勾引取て猿轡猿繫。銘々持よる弥生の十五夜空おそ。ろしき世利分ヶ也。

あら。痛しや梅若丸。過し館の乱れより。うき寝も長の旅の空へ泣くも。なかせぬ猿轡。

後手にいましめ。奥州の駒太郎。蝦夷が島の鬼四郎。柳の籠ふり立く追来り。コリヤく仲間の者共。今夜の市にさまたらしいめすが有ラは。こんなわつばとばくろしていなふかいと。梅若君の顔押上れば。皆月影にすかし見て。ヲ、(二十オ)こりやよいわつばじや。ドリヤかたづけて談合せふと。我レ一チ子供を引連く立ならべは。

ム、悴共はもふ是計りか。コリヤ鬼四郎。どいつもくよふ揃ふたがらくた共。思はしい代物もなし。目利して買そふな。相人もないとけこなせば。コリヤやいく。人買して喰もの共が子供の目利せいでよいかい。買がなんぼにして売ぞ。ハテ目利するなら付てかへ。ヲつけ買イにせふ市にふれ。ふらふが買か。かをくと顔赤らめる商買づく。

皆立か、れば駒太郎。若君をひつさげ出。サア付てかへ。やつちやくくと。ソレなんぼ。発句は老貫。一貫くく。二

百よ〜。三百四百五百よ。〜〜〜ア、いやもふおけ〜。此代物は仮初ながら小判道具。マアはした錢では談合がならぬと。鬼四郎が（二十ウ）悪口に仲間の者共腹を立て。イヤ錢で売らぬ代物なら市へ持つて出さらぬがよいわい。エ、ほつこしもない夜をふかした。何シと皆いなぬかい。ワいの〜。あんなやつらが代物は。干付てこますがよいと口〜わめき立帰る。

かゝる所へ〜イ〜と呼かけ。近江の山田の三郎。綿帽子を女に打させ。肩にすがつて来りしは雀目病とぞしられたり。

ホイ思ひがけない三郎。人買仲間の夜市に迄。ほてくろしい女房をだかへあるくかい。イヤこいつは代物じや。噂めは此跡の宿で持病おこし寝てけつく。女房をおとりにかけ。女連しと思はせてこんなやつを勾引た。何シとよい比な雌子ではないかと。綿ほうし脱すれば。サツテモ見事。こいつはしつほり直打が（二十一オ）有ルと。見込ムも理り。野上の廓で名高き花子。盛たおられ猿轡つらやにくやの目元トさへ色を含て美しき。地ウ顔を二人はためつすがめつ。ヤイ山三ぶ。此めろはどふする積じや。ヲ今仲間の者共に宿はづれて逢つて聞いた。わいらふたりの手に器量のよいわつばが有ルげな。其ころな代物が入用。ヲ、此めるとならかへてやる。逆の事顔の道具揃へて見よかと駒太郎。とく猿轡に梅花の移ばつと薫ば。

エ、うまくさやと俄に鼻息荒なし。腰よぢらしてとろ〜目。ひつたり抱付キコリヤ女。奥州へ連して下る。泊々はおれがいたはりだいてねる。道も辛勞か負てやる。やいの〜としなだれかゝる。

荒くれ男の（二十一ウ）頬摺を。里に馴たる花子は流石。つれなふもいひ放さず。数ならぬ身にお志は嬉しけれ共。わたしは深ふいひかはした殿御がござんす。それにさへ引わかれ。親子づれで江戸の町へいぬるもの。駿河の府中の旅籠屋に

て。母様は俄の病氣。せめてま一度お情に。府中へ帰してくださんせとくとき。歎くを。エ、かしましい談合の邪魔と鬼四郎。又猿轡ほうばらせ。ナント三ぶ。こちらのわつばとかへてくれるか。ヲ、かへてはやるが。そつちのわつばはどんな類。見なければどおりや雀目で埒明ぬ。ハテたつた今仲間のやつらに。器量の様子聞たでないかい。サア。それじやによつて談合する。先此注文と引合してくれと。(二十二オ) さし出す書付鬼四郎ひつ取て月にすかし。エ、何んじや。年の比十一二。すうはりとして顔おも長に。色白な男のがき。イヤもふ此注文にすつて付けたこつちの代物。其めろさいとむすがへにしてくれんかい。ヲ、注文に似寄たやつなら談合せふが。まんざらむづでは商に拍子がない。吞代程でも規模つけい。テモきめ細に損せぬやつ。よいはきつさり。是じやくと錢貳百。渡せば受取りまつとないかい。ハアテ打て置ケ。さらりく三人手を打。ヤイ三郎わつばめを受とれ。代物に疵付ケまいと。都から追てきた柳の篋そへて置ケと。梅若丸を山田に渡し。花子をひつたて二人の人買陸奥へさして立帰る。

地中 跡には雀目の三郎が(二十二ウ) 主共しらず。梅若君を撫廻し。ホ、よい比なわつばめじや。サアうせいと胸ぐら取て引起す。時しも三月十五夜の月の光りに若君顔見て。ヤア三郎かといはんも叶はぬ猿轡。物いひたげに悶給ふを。

脚 イヤびこくと何ひろぐ。身を大体の人買と思ふか。なまぬるこい柳の篋くらふたとはあてが違ふ。山田の三郎がだんびら針の味見せふかと柄に手をかけ。サアくどうじやくと。見へぬ雀目をぐつとむき出し。手強ふおどす詞と形相。稚心に誠と思ひ。そ、人外の三郎め。非道働く下臈としらず家来となし。あのト腰あたへし事のくやしやと。無念の身振ひがた〜。手にこたゆれば。

舞、ふるふはこはいかちつとそふもおじやるまい。こわくば（二十三オ）すなをに歩でうせいと。引立れば身をいぶりに。振切給ふを逃ると心得。飛か、つて首筋擱。よふあた、かに逃そふや。雀目を見込みつ、走らふとは横着な素丁稚め。イデ一ト療治とおどしの刃。するりとぬいて振上ケく割打に。力身計りのあしらいも。あてどはうとく手の内廻つて一ト刀。ずつかりきられてうん共いはれず。どうどまろふと白刃の鋒。朱に染ミしを又ふり上ケ。のりがしたへは恟し。抜身を撫てホイ。こりや思はず手をおふせたか。ヤレく不便やどりやどこにとかなた。こなたを盲捜しにさぐり寄だき起して。コリヤわつば。稚心に嘸むごい人買と恨んが。全く身の欲でない一通りを聞てくたば（二十三ウ）れ。我は近江の国の山田の三郎といふ者。吉田家の御次男松若様と申を。我カ粉市松と名を呼かくまひ奉る忠義を感じ。御兄梅若様某を御家来となし下されし所に。右大将親平が讒によつて。吉田のお家断絶。猶も敵の詮義きびしく。松若丸の首討て出す者あらは。褒美をやらんと右大将が領分。美濃近江に触をなす。され共此三郎が。かくまい居ると知ル者なければ。姑に預け国に残し。女房を雀目の杖に引連し。落行キ給ふ御主人達をしたい。此辺迄罷り下る道すがら。そちを我カ手へ買イ取た所存は。松若君のまさかの時。御身代りに立んと思ひしに。早まつたるは雀目の兎相そちが定（二十四オ）業。去りながら悦べ。此一ト腰は。梅若君より給はつたる金作り。匹夫の粉の身に取てはいみじき果報。松若殿と敵を欺き。褒美をもらい忠義を立る。不肖ながら死んでくれ。猿轡をとき首を刎て取したけれ共。未練に歎く声をさかば。気おくれして手につけられまい。所詮助らぬ命と明らめ。くたばりおろふと突飛されて梅若丸。ふかき忠義の心を聞ケば。恨むにも恨れず。不便や雀目で。我し共しらず手にかけて跡で悔まん。夜明る迄のがる、たけとよろほひ。くこのき給ふをサアわつば。覚悟はよいかと尋る手先キの

所にあらねば。イヤア大事を語らせ比興働らく小駝め。逃しはせじ一ト打にと。なぐつて廻れば身をひらき探。(二十四ウ)
刃をぬけつくぐるもかよはき手おいの。主は目見へて物いわれず。物いふ家来は雀目でとぼく追つ。おはれつ主従廻る
因果同士。いづれせひなき折からに。

夫トを待かね女房お熊。何心なく来か、り此体見るより三郎殿。コリヤ何事と中に入。稚い者をどうよくなと夫トをつきのけ。
かはいやそちは手を負つたか。何者の子ぞいじらしやくるしからふと。縄猿轡ときほどけはヤア女房。心当の有ルわつばじや。
其儘にしてのいて討せと立か、れはウ三郎わしじやはいのふ。ナニそふおつしやるは。ヲ、梅若じやはいのふ。ホイ。ハアはつ
と飛のき色青ざめ。四頭八倒はの根も合ねば。

ヤアくすりや此お子は吉田の若君。こなたが日外お目みへした。御主人様(二十五才)ではないかいの。サ、そふ共しら
ず手につけ。エ、情ない事をした。松若君の身代りにと買取しが。勾引来た駒太郎。鬼四郎の兩人に。其日都北白川で出合
つたと気が付くか。どこから出た代物と一ト言とふたら。こんな鹿相はせまいもの。出かし顔のおどしだて。御主人共しらず
深手を負せし極重罪。お腹いせに梅若様の。お手にか、つて一歩様に刻りたいが。痛手にてましますもふそれも叶ふま
い。此罪なんで亡さふぞ。御生キ顔さへ拝せぬ。エツエ恨めしい雀目やと。まぶたをむしりじだんだ踏。悔み歎けば女房
も只伏しづむ計也。

深手によはる。梅若君。くるしき息の下よりも。扱はそなたは。三郎の内義かいなふ。皆弟松若の為思ふての(二十五ウ)
間違なれば。恨も。残らぬ悔んでたもんな夫婦の衆。おりや人買の手に入ると。どうで命はつぐまいと。とふから覚悟

極めて居る。身の上は明らめても。只忘れぬは。父の御運の拙き悲しさ。此間かふくる道く。見上けて通りし。富士のお山は権現様。一度禪定する者は。七難即滅疑ひなしと。人の噂身にしみく。哀れ我れもお山へのほり。父上の讒者の災難滅したやと。思ふにかいなく。剩此有様。死で冥途の迷ひとなるは是計り。三郎頼む。コレ此肌にかけし守りの内には我産髮。是をお山へ納てたもれば。おれが禪定する同然。父上の汚名を清め吉田の家を引おこし。松若を世に立てたも。草のかげから悦ばん。

我亡骸は都の人の足(二十六オ)手影もなつかしければ。此川渡しの上り場の街に埋み。最前の者共が。打立来りし柳の枝は古郷の庭木。塚の印に植てたも。誠や旅をする者には。河辺に柳を結て寿き送ると聞ケド。我れは戻らぬ死出の旅。生所を去つて此川の。道の辺の土と成ル。浅まし身の果や。ア、恋しの父上。名残おしの母うへ様。床しと思ふ松若の顔ばせ。たつた一ト目見て死たい。言と置キもしたけれど。もふ目がくらんでくと。舌もつれ目の色かはればお熊が抱しめ。コレのお申若君様。梅若様と。惜むかいなき春の夜の。短き夢と消給ふハア。悲しや最早お息がせぬはいのふと。歎けば夫とは立たり居たり面目。涙の声を上。

エ、悔しい女房共。(二十六ウ)そなたが常々大事が出来ふ。あぶない渡世。止てくれと異見せしは幾度。今といふ今身にむ様な此三郎。せめて腹切り冥途のお供と。刀をさぐつて取手にすがり。コレこなたが死んで松若様は誰レが見育御代に立る。殊に今梅若君末期の仰の此お守り。富士のお山へ。おさめに登らふと思ふ心はないか。御遺言迄無にせふとは。エ、いひがないお人やと。恥しめ拔身をもぎとれば。すりや死ぬるにもしなれぬか。ハア。はつと計に五体も痠。どふとまるべは女

房も。わつと一どにひれふして。歎く涙に隅田川の水がさ。増る計也。

既に其夜も明ヶがたの空定メなきうろく眼。立帰る駒太郎鬼四郎。コリヤく山三ぶ。まだそこに(二十七オ) いるかい。

先にかへたためらうめを。駒太郎がだいてねると。宿屋で縄ときじやらつきおる間につ、走ッて行衛がしれぬ。わつばを戻

してもらふかい。イヤさあこつちにも其わつばは。是見よ此通りについ殺してのけた。先のめろは府中へいなしてくれとほ

へたでないか。ほつかけて連していね。イヤべんくんと駿河迄行ふより。鼻の先の此お熊。わつばが代りにこつちへおこせと。

取つく腕先もぎ放せば。ヤア眼も見へぬさまをしてほでんがうと。後へ廻つて鬼四郎。三ぶが足かきうんとのめらせ乗ッ

かくる。こりやどうしやるとすがる女房をつきのけはねのけ。ぶつたり踏だりさいなめ共。手むかひならぬ雀目の悲しさ。

ぜひもなんぎの(二十七ウ) まつ最中。ごんくひしく野寺のかねに夜はほのく。

眼は見ゆるぞ女房悦べもふ楽じやと。いひさま二人をはねかへし。ふみ付く篠目に。雀目の返報こたへたかと。なげ込ほ

りこむ隅田の川瀬。うかれたよふどろぼう共底はかとなく流行。

ヲ、危い所で夜が明たと。胸なでおろせは。ヤア女房。おりや夜が明ヶてあのお姿。どふも目当て見ていられぬと悔み歎けば

ア、是々。いつ迄いふてもかへらぬ諄。お佐は富士の権現様へ禪定してさんげ有レ。先人目より朝日におそれ。葬が亡

目のお為とせり立られて。

せひ泣々立より夫トがかき上る。梅若君の亡骸に囉。てんがいと女房がかさす柳の一ト枝は。塚の印シに有縁無縁のゑかうの

種。(二十八オ) 黎明のからすかはい。くの声につれ泣が。れてぞ三重へたどり行。

時ウキンししらぬ。雪ハルの高根ハルやふもと迄中。雪かたまがふ夜ウルのながめの遅フシ桜ウツク。

松井地ウの源五兼俊ハル中が。御台所ウを背ウにしつかと奥州ハルさして御中供中と敵ウの。討手ウをよくれば迷ハルふ夜ハルルの道富士フフ中の裾野ウに着ウにけり。

桔梗地色ウの前色おり立色給色ひ。都調北野へ尋行色しに。梅若丸色の行衛色しれず。君色のゆかりの国色なれば。奥州色へと思色ひ立地中。跡地中よりかゝる

討手ウを遁のれ。此所色迄色来りしは源五色の忠節色。何ウとぞ夫ツマの少将色様に廻色り合色たいくと。思ハルふ一途グに気色もせかれ。名所調古跡色に目色は

付ウカねど。問地ハルねどそれと白雪色の。高根色はふじの山成中ルかと暫フシし見色とれておはすれば。

源五地色ハルも俱色に打色ながめ。夜目調にさへあの風景地江戸。御地中らん色(二十八ウ)遊ウせ山色の腰色を廻色る雲色の帯色。霞ハルの衣裾ウながく。足高山色。

鋸地色が嵩色。ひくにひかれぬ弓矢フシの習色。又色もや討手ウがかかりなば。此所ウにて防色べし先ハルッ。それ迄ウはお勞ウばらし。是キなる桜地色中

の木陰ウに立寄色り休ハルませ給色へと。申色上色れはいやとよ源五調。敵調右大将色親平色より。諸方色へ討手ウをかけぬれば。若地色中もやさがし出ハルされ

ん。其悲ウしさにくらぶれば。野山ウにふす共中うしと思色はじ。しぬる共花ウの陰ウにかくれんと。歌フシにも詠色ば。

咲地色中キもおくれすちりも始ハルメぬ。花色を主色に草枕色と袖色をかたしきふし給フシふ。

同地ハルし類色の落人色すがた。親ウ子色ト思色しき女色どし。ア調レくあそこへ人色かい共色がおはへてくる。か、さん早地ハルふと手色を引色て。かフシしこの

こかげに隠色るれば。

跡地ハルより追ウつかけきたる二人色の人買色。ほくそ頭巾ウに目色をひからし御台色を(二十九オ)見色るより。コリヤく爰色にけつかるは

と。一度地ハルにかゝるを松井色の源五色をりかみつかんで打ウ付色く御台色をかこふてつ、立色ば。あいたくと頬ウをしかめて起色上色り。お

れ共色は奥州色の駒太郎色。ゑぞが鳥色の鬼四郎色といふ人色かい。取色にがしたあめらう。貯色だてしやるかと。ぎしみかゝるをハルはつ

たとねめ付ケ。是は身が主君。人たがいして必跡で佐言すなよと。いふに二人は桔梗の前の御顔を。夜陰にすかしてとつく
と見。ヤアほんに是は人たがひ。廿日計りいぜん。隅田川で取にがした女め付ケ込だは此道筋。遠くは行まじサアこいと。か
け出すを引ずり戻してもんどりうたせ。

臂もおれよとふみ付く。四民を離れ。非道の商売働く儂等。ふち放すは諸人の為と。反打(二十九ウ)かくれはア、
是々源五。奥州の人商人と有レは。我夫のゆかりの国のもの。命を助てやつたもと。情も深き仰にはつと引立く。命
冥加な儂等。早く此場をなくなれと。首すじ擱で狗投。ころころくと人買共。命からく逃ちつたり。

桜の陰より母娘。走り出て手をつかへ。となたかは存じませぬが。わらはが娘が人買の手に渡るを。救せ給ふお侍イ様は。
神か仏か目ざましい今のお働キ忝ふござります。ヲ、悦びは理り。見れは由ある人そふなに。何として人買の手に渡られしと。
尋給へは娘は顔を打赤め。はづかしながらわたしは。美濃の国がみの廓のけいせい。様子有ッて勤を遁し。親里へ帰る
旅の空。風の心地とか、さんの大煩ひ。此駿河の府中に逗留している内に。人かい(三十オ)に勾引れ。すつての事に奥
州のかたへ連し行クを。勤メせし身の一徳。色でたらして府中の町へにけ戻り。病上りの母様をつれまして。古郷のかたへ趣
クを又人かいに見付られ。危い所を助りし。お礼は申尽されぬと悦ふ事は限りなし。

ム、野上のくるわで勤をせし人と有レば。よしだの少将惟貞卿に。ふかく思はれ参らせし。斑女花子とて名高キ二人の遊君に
も。定し近付で有ふの。扱ッても委しい訳をよふ御ぞんし。其花子と申は私が事。姉女郎の斑女さんにぎり立て。少将様
ンと縁を切り。親もとへいぬるもつらし。添にもそれはれぬ心のほいなさ。御推量なさんせと。涙にくれていひければ。

ヤア扱は聞及ぶ。おけいせいの花子殿か是こそはよしだの少将惟貞卿のみだい所。かくいふ某は松井の源五兼俊。エ、。是はまあく。御台様共しらず最前よりのおしつけ。(三十ウ) 御ゆるされて下さりませと母諸共に敬へは。

何んのいの。しらぬ事なればおしつけはたがひに有りうち。京の九条よりふかきなじみの花子の前。十二年いぜん夫の少将殿。奥州下の折から野上の宿迄したい行き。それよりすぐに斑女諸共かの里に勤メして。久しぶりにて我君の。お目にか、りし二人の衆にはあやかり物。自は今度の騒動に。思ひ子の梅若には離れく。夫は野上の廓より。奥州のかたへ落行給ふとの取ぎた。お行衛を知ルものはそもじならで外にはない。教てたべと計りにて。託給へはお道理様やと。花子も母も諸共にとかふ。諾も泣キ居たる。

源五重て某は元ト江州高島の与惣と申て斑女が兄。子細有て今度松井の兵衛殿の養子と成り。御台所桔梗の前様を預り。此所迄(三十一オ) 御供申旁に出合しは。天道の引合セ。我君の御在家を。しらしてたべ花子殿。お袋と思ひ入て頼ムにぞ。サイナ殿さんの御有かを知つたら。何んのかくしやんしよ。不破の関で別しが我君様のお顔の見おさめ。あれ程迄斑女さんへのほり詰メてい給へは。奥州へなんのお下りなされふぞ。少将様に仕へては。わたしら親子が心のすまぬ訳も有り。御台様に廻り合しこそ幸イ。吉田のお家へ忠義か立たたふござんすと。いふに母は打點き。イヤのふ花子。そなたに忠義を立さすよい思案しておいた。御台様。源五殿にもお聞なされて下さりませ。もと此母は吉田のお家に仕へし竊の者。伊賀の平次成澄が娘濂町とて。十六七のうはき盛。いひかはした夫と。都を立退キしは卅年いぜん。連合イも(三十一ウ) 元トはよし有ル人なれ共。今は江戸に住所して。照降町の雪踏屋又右衛門と申ます。物領息子は豆蔵とて。一ト器量ある者。一生町

人で朽果らん事を悲しみ。武者修行に出て行衛がしれねは。妹、娘の此花子に申付ケ。今にても敵の大勢が寄せかけなば。ゆゑ、しき忠義立させてお目につかけふ。アノか、さんのつがもない事ばつかり。うつての大ぜいを引受て娘ごぜの身で何シとまあ。サアそこが母が一ツの工夫。松井殿のお手に餘る大勢を。ひがいなすなそなたに防する。思案もすれば有ルものと。いふまもあらせず間遠に聞ゆる人馬の音。源五驚きヤア。あの人音トは敵の討手。濳町殿親子は御台所を伴ふて。あれなる桜のこかげへと。すゝめやれば。

討手の大将。内記左衛門氏廣大勢引ぐし。鎧ふんばり大おん上。ヤアくそれなるは吉田の家(三十二才)の今参り。松井の源五と見たはひが目か。高階の右大将親平公見ぬ恋にあこがれ給ふ。桔梗の前を召つれて。汝も俱に降参せよ。りくつばると氏廣が。鎧にかくるが何シとくと片手矢はげて匄たり。

エ、さもしき氏廣。某たゞ一人に手おちして飛道具にて向ひしか。非道のさび矢千筋万すじいかへる共。切つてく切払ひ。汝がそつ首さらへ落すはたつた今と。刀打ふり立たる所へ。コレのお早まるまいぞ桔梗の前が出るからは。松井の源五に科はないと。走りいづるは御台にあらで。思いがけなきけいせい花子。さしもの源五もはつと計り。扱は最前母親が娘に忠義を立させる。思案といひしは是なるかと。女心のけなげさを。かんじてとかふの詞なし。

内記左衛門駒のりはなし花子が前に(三十二才)立よつて。吉田家の御台顔なさつても。主君右大将殿の御あせいには。迎も叶はぬと思ひ居膳とはよい御思案と。したり顔なる権柄不礼。源五は聞かね舌の根切て切さげんと。飛んでかゝるを花子せいしてコリやく源五。自が是へ名乗て出たのに。家来のそちが何しつて。氏廣へ慮外すなど。詞つかひも勿体も。廓

のふうを引かへて。御台所に似紫。桔梗の前にまがふらん。

地色ハル 滋町御台の上着の小袖たづさへ出。申桔梗の前様。とくよりも右大将様のお心に随ひ給へは。此うばが在所の爰迄。遙々お出なされいでもよい物を。ちぶさの親の私が。手づから着ます此袍。記念と思ふて召ませと。きすれば花子はかきくもり。

今の別々に親と子の。詞はなくて袖しぼる。小袖はすぐに(三十三オ)母の衣。ほろと互いに泣く涙。心ぞ思ひやられたり。

詞ホ、うばめがさしづで、袍を召つたれば又見事。コリヤ成上りの御からう。桔梗の前と俱に降参する気はないか。とつくりと

思案して。跡の宿の本陣返事をしろ。某は御台所を御供申す。早くござれとあらけなく。けいせい花子を引立させ。雑

人引つれ内記左衛門本陣へさして立帰る。

色コレのお待つてと。桔梗の前は後手に。縛られながら走り出させ給ふにぞ。源五見るより。ヤア何故にコ、此有様と。かけ寄りいましめ引ほどけはわつとなき。自を爰へ出すまいと。あの滋町の情の繩のか、へ帯。く、りつきやつた桜の枝が。まちつ

と早ふ折れるなら。花子の前を身代りに敵の手へはやるまい物。我夫のお情をかけられしあの(三十三ウ)人になんぎさせ。

何シとながらへ居られふぞ。是迄也と隨身の一腰に。手をかけ給ふをコハ御短慮と。とゞむる二人をつきのけく。どふ有て

も。花子の前を取戻さねば。本妻妾の義理た、ずと一途にせまる。仰に源五思案を究め。ハ、いかにもそふじや。御台所の

御生害を止んには。内記左衛門がす、めに任せ。某が降参して。折をもつて花子の前を。取かへすこそ忠義なれ。主君少

將殿に廻り合る、それ迄は。滋町殿心底見込で。御台所の御身のうへを。頼ミ申といひすて、一ッ走にかけ行ケば

色コレのふしはし源五殿。娘が命は数ならず。返忠降参の。悪名取てよいかいと。かけ出しては立戻り。御台様たゞ。独。

こゝに残して行にもゆかれず。ハア何とせんぜひもなやと。思ひ止まる(三十四才)時しもあれ。富士の高根の霞のまに
くちらめく火影。あれを見や濳町。ほんになあ。あれはどうでも此お山へ。禪定する行者の炬。御らんぜ最早夜明ヶ
にちかいやら。火かけはうすく人かげはありくと。白装束で坂を下りにいざつておる。ほんにそなたのいやる通り。
ふじせんげんの行人に究つた。ヲ、あぶな。あれく。先へ二人跡から三人。ひよつと独がこけたなら。同行五人が。
将基たをしじや有るまいか。遠目に見てさへひやいなもの。眈、うちに残らずふもとの。桜のかけへ隠たと。いふに御台
は。御手を合せ遙拝有。なむや。富士浅間大ごんげん。行衛知レざる夫の少将。我子梅若丸に廻り合せてたび給へ。自
山へ禪定と。御祈願あれは。是申。いかに殿御のおおじや(三十四ウ)とて。富士のお山へ女子はきんぜい。それく
そこへ。今の行者がくるはいなど。いふま程なくほらがいの声喧く。檜の笠に金剛杖。ふじを画し白き行衣の二人つれ。
濳町ちかづきソフ行者達。富士禪定は水無月の朔日よりと聞つるに。扱つても早い御さんけい。ヲ、ませた事を尋る女中。六
月の朔日からは余国のもの、参詣。悉くも此親仁は。江州矢橋の次郎兵衛法印といふ先達。おらが国からは。百日の行もせ
す春山より参詣する。謂は昔く。近江の湖が一夜にほれて。此富士山に成たげな。もとがこちの国の土じやによつて。
ついそお山にけさ、の有た例はないが。今度はひよんな邪客を連れ立たれば作左。小きみが悪かつたのふ。ヲ、こきみのわ
るい段かいの。なんぼこちの国の者でもとが(三十五才)人買の山田の三郎。なしおいた悪業でひよつと嵐にとられふか。
狗賓殿にかけられふかと案じたに。同行五人が。無事で下向しました。有がたい事じやこんせぬかと。聞クに御台も濳町も
お山のかたをながむれば山伏一人驚直に。矢をいるやうにおりるのは。あれもお国の人なるかと。問れて二人はかぶりふ

り。イヤ〜今の山伏は此ふもとの村山。一本杉の降寂院とて。こちららが宿坊じやが。何事なれば早い下山。ヤアあれ〜。あれなる桜のしげみ。風もふかぬにさはめくは。跡に残った同行共に。けさ、はないかと二人はあぶ〜。見やるあなたの運桜。はげしき富士の山風ちるは風か。ぐひんのわざかと気をもみ。あせる其所へ。

同行老人かけ来りノウおそろしや先達殿。宿坊の降寂院がお山より追かけて。邪客の山田の(三十五ウ)三郎を。主の敵じやとて。打合フやら切合フやら。夢見たやふな大騒動と。聞より驚き。ヒヤアこんな時は同行も我レ一に身ざんまいと。逃る所へ。跡に残りし同行片息になつて馳付キ。なんなく山田の三郎は。降寂院に深手をおふて鬘ちんがい。どうで命は有まい。ノウおとろしやべらついて。しでの山田の三郎が。供をせふよりみなこいと。逃るも先達足早に。蜘蛛の子ちらすごとく也。

濳町御台を後にかこい。見やるそなたへ山田の三郎。白き行衣を。朱になしてにげ来り。

ヤア〜女中さはがれそ頼たき事有り。拙者は。身に覚ある敵討にて。かくのごとく深手をおい逃隠る。其子細は。国本トに世になき主人をかくまふている某。此場の命助りたい。敵がおつかけ来る共穴かしこ。我在家を人にもらして給はるな。(三十六オ) 女ふぜいに事を分けてのお頼み。何しに人に洩そふぞ。いづくへ成共はや落給へ。

ハ、ア忝し。御らんのごとく急所の深疵。にげ延ん事思ひもよらずと。たすきにかけし白布ほどいて髷の。手疵を押巻ひん結び。是なる桜に身を忍んと。諸手をかけて飛上り。枝より。枝によちのほれば。飛ちる桜の花の雪。ふりかへりみる向の峽より。かけつてくる山伏姿。そりやこそきたはと。御台濳町叢に深く。忍へは三郎が。身はしよんぼりと白さぎの。

中
獵師の鎧を遁れんと梢に忍フふぜい也。

降寂院は拔身を血汐にそみかくだの。露分衣すゞかけや。頭巾に頰ふりみだき。山田が行衛を爰よ。彼と尋さがすを。

地
瀧町が見るに驚き走り出。ナフおまへは我父いがの平次。成澄(三十六ウ)様ではないかいのとすがり。付ケは

地
ヤア汝は我娘。瀧町なるかといはんとせしが。取てつきのけ。又かけ出せば御台所。草かきわけて立出給ひノウ聞及ぶ。伊賀の平次成澄なるか。自こそ少将のつま桔梗の前。忠義ある瀧町なれば親子のたいめんしてたもと。仰もあへぬにハ、はつと飛しされは。梢に忍ぶ三郎も共に驚ク心を鎮。しゅうをとつくととき、いたる。

地
降寂院のりおしぬぐひ刀をおさめ。我カ事は少将殿の御父。吉田の前生秋貞公に仕へし竊の者なりしが。あれなる娘瀧町は。密夫と立退不所存もの。伊賀流の竊の術は血筋の外。他人に相伝せざる家の掟。外に伝る妨なれば。行末あぢ

きなく思ひ切り出家せんとは思へ共。世に捨られ坊主と。人に笑れんも口惜く。当所村(三十七オ)山に身をよせ卅年来。

ふじ禪定の修験者となつて罷有ル所に。今度右大将親平の悪逆にてお家の乱し折から。娘めが忠義を尽せりと。御台所の仰にめんじ。昔の誤をゆるしてこます。去ながら。聲の小豊治は。もと敵右大将がけらい。今牟人の身と成ても。古主を

したふかしたはぬか。夫トか心底しつづらめ。有り様に申せ聞んと詰メかくれば。瀧町涙の顔ふり上其お咎は御尤。最前より御台様に。連合の本名をかくしたも。お心をおかしますまいため計り。たとひ夫トは。古主右大将殿へ志が有ルにもせよ。

一つになるやうな。さもししい心ではござりませぬ。ヲ、何シのいの。たつた今娘の花子を自ラが。代りにやりやつた忠義を見て。疑ふてよい物かいの。ヤア扱は我孫の花子は。敵の虜となり(三十七ウ)つるかど。いふに瀧町きよつとして。おまへ

はどふして。花子が事御存じ。ヲ、知ルこそ詔有。御台所にも聞し召れ下されよ。近曾村山の我庵リへ。花子が兄の豆蔵といふ者来て。此降寂院を祖父共しらず。武士の果と見込で。武芸のしなん頼みたしと。町人に似合ざる望。根をたんだゆれは江戸の町。照降町の雪踏屋の舂。父が本名は加藤小豊治祐隆と申せし京家の武士。其むかしを忘しず。何とぞ侍に成りたきゆへ。武者修行に出て候と。彼が委き咄はすぐに。富士ごんけんの御告。互々にしらぬちい孫を引合せ給ふと有難くて。伊賀流の竊の極意を相伝して。羚羊の裘とて家に伝はる。竊の装束迄をあたへたり。是は唐の羚羊といふもの。血を取て染たる裘。其色赤けれ共(三十八才)忍ぶに人の目にた、ずしんたい。かけ引自然と身がるに成ル事は。家の妙術。羚羊の獸は宿する時に木の枝に。角をかけて其形。ちいさくなれば。人の眼に。見へかたし去ルによつて。詩を作るにも心ふかく。其意知しがたきを羚羊の。角に論るも此謂そや。ひでんをもつて彼裘を着すれば。六尺ゆたかの豆蔵が形チ。忽ちいさく見ゆる事一尺計。かゝる竊の術を授たる折から。吉田の家の騒動と街の風聞。すぐに豆蔵は美濃国へつかはし。我は主君少将殿御利運の折の為。いつくよりもお山へ早く禪定せしに。近江の国より上りし行人の内に。山田の三郎といふもの。一ッの守袋をふじの八葉におさめ。是は不慮の義有つて。我手にかけてし主人の遺物と。身のざいごうをさんげし。禁へ(三十八ウ)下かりし跡にて。其守袋を披見て。三郎が我カ君を。手にかけてし事露頭せりと。跡は詞も。涙ぐむ。

あらきづかひや三郎が手にかけしとは誰なるぞと。梅若丸の御さいごをしらぬ母君濛町より。しげる梢に身を忍ぶ。山田が思ひぞせつなけれ。歎キをかけじと自らに隠しやつてもどうではしれる。殺され給ふは夫の少将殿かいの。若は梅若

様かいなど。あせる二人が天窓の上から。ヲ、其證跡は某。直に白状せんと。ひつくりかへつて梢から。おつればばつとちる花よりはやきたそくの降寂院。山田が簪に打跨し其勢ひ。天邪鬼を組ふせ給ふ毘沙門の座像を見るもかくやらん。反打かけてみだい所。詰寄給へはヤア濠町あれ止よ。誰が敵共聞定メず早まり給ふな。かくのごとく(三十九才)降寂院が。膝の下タにひしぎ付けたる三郎めは。ぢごくおとしの鼠も同前。かれがお山へ納たる。守袋は是也と。懐中より取出せは朝日にか、やく蜀江の。錦のもやうを御台所。ノウウはこそは我子梅若か。産髪入し守袋。扱は其。三郎が手にかけて殺したるか。憎や悲しとかつばとふし。我子をかせ梅若戻せと。三郎が身をかきむしり狂気のごとくせんご。ふかくの御歎き。

降寂院涙にうるむ大の眼に角を立。ヤイ三郎。儕お山でさんげの時。御主人を手にかけてしとぬかしたれば本名はしらね共。吉田のお家の。御けらいすじに極つた。主殺しの悪罪人。一思ひに殺んより。梅若君御さいごの有様。望に任せて白状さする。早立上れと。髻をつかんで引おこせは。わるびれたるけしきもなく。誠に膽婆城の鴿は。(三十九ウ)八万劫が其間タ。猶はとのすがたをかへずとは。山田三郎が。事なるぞや。人かいの悪業いく万劫をふるとても。遁る、時節の中へべきか。一ト度都にて。梅若君の御けらいと成つたれば。三郎がつらをよく御存し有ながら。若君猿轡にて物の給ふ事叶はず。我レは雀目で眼見へねば。主共白刃のおどしの割打。手の廻りしがいんぐのは始メ。そくじに腹切つて。めいどへの御供と思ひしが。若宮いまはの仰には。御父少将殿。御運の披るべき祈りのため。富士ごんげんへ大願をかけ置たれば。梅若に代て禪定し。肌守りの産髪をふじのお山へ。納めてくれよとの御遺言背ば不忠の上塗と。我女房が。切ッなるいさめに命

を延はり。すまぬ心を隅田川の片辺りに御しがいを葬て候と。語もはかなき梅若のさいごのしだいを。聞ケば聞クほど御母みだいの瀧町も。悲しさかうじて詞も出ず。きへ入ル計に歎るゝ。ヤア三郎。さほど(四十オ) けつぱくなる性根ならば。梅若君の。御ゆいげんを立たるこそ幸イ。なぜ潔相手にならぬ。サア立上つて勝負くと三人が。鼎になつて詰メかくれば。ア、暫ク御待下さるべし。吉田のお家へ忠義のすじ。今一言申たしと。聞よりさしもの降寂院。お家へ忠義のすじと有レば。みだい様御ひかへ。娘もせくなとおしとゞめ。刃をふせてひかへける。

手おいの三郎ためいきをほつとつぎ。我レはみの、くに野上の長が弟。野上の藤太といつし者。けいせい班女のはらに御生有し。吉田の少将殿の御次男。松若丸様をわらのうへより。里に取つて我子となし。十一年此かた養育奉り。御成人有ルに随ひ。何とぞひんくをおめにかげじと思ふから。わるい事と知りながら人かいを渡世にして。多の人の子に。うきめを見せ剩へ。主殺しと成たる極重悪人。ふじ禪定するならば。このは天狗の。距にか、つて引(四十ウ) さかれんは必定と。かくごせしにはからずも。旁に出合イ首とらるゝは。我カ身に取ての此世の面目。みらいにまします梅若君の。御うつぶんもはるゝ道理なれ共。我死ンでは。年よつた姑や女房がいかでか松若君を。見そだつべきと心がひかされ。最前のやうに逃かくれしを。比興みれんと旁の。思れん手前も面目ない。降寂院殿。御辺がおつかけ。主の敵と切かけられし。其時いまだ夜は明ケやらず。やつぱり雀目でとほくせは。一ト思ひに殺るゝて有ふつ物。なまなか眼病がなおつて爰迄にげのび。生恥さらす主殺しの大罪人。竹鋸。逆櫟におこなはるゝとて。更々恨と思ふまじ。其かかりには。江州山田に。かくまい置イたる松若丸の。御先途を見とゞけて給はれ。頼おくは是計と涙ながらに手を合せ。深手にくるしむいま

はの願ねがい。ことほりきいて三人は。(四十一オ) 山田が心の不便ふべんさに。しばしいらへもなかりしが。

涙なみだのひまより桔梗ききやうの前扱まへつかはのがみの藤太とは。三郎そなたの事かいの。わらはが為には義理ぎり有ありまつわか。忠義ちゅうぎふかき人なれば恨うらみは残のこらぬくと。濛町もうちやう諸共しよどもさしよつて。介抱かいほう有あれば降寂院かうじやくいん。さばかり忠義ちゅうぎ有あり。御刃ごにとしらず手にかけて今の後悔こうかい。七十ななじゅうに餘あまる此こゝおいほれ。何なにのやくに立たべきぞ。吉田きちだのお家の為と思おもひ。三郎さんらうしんではしおくりやるなど。しほれぬかほにちる涙なみだ。何なににたとへんいがぐりに露つゆをそ、ぎしごとく也。

山田やまだはいらつて。ヤアかゝるいたでに五ござうをもみ。此上こゝに命いのちがつゞくべきか。いか程ほどに頼たのむ共ども。いづれもの御手ごてにかけては給たまはるまじ。迎むかへものがれぬ必死ひつしの深手ふかて。たとへ骸からたは臙ひしくほになるとても。魂たましいはいつかなしなぬ。忠信ちゅうしんの一念いっぺんは。鬼きとな

りしんと成なつて。松若君まつわかしのまさかの御用ごようにた、んづ物と。天あまに。むかつて(四十一ウ) 誓ちかの詞ことば。手疵てづきを包つつみし布ぬいひつぼどき。

くびにまとい諸手しよてをはつてぐつとしめ。両眼りやうがんありく見開みひらながら。いき引取ひきとてふじの、に。はかなきさいごぞせひもなし。軀みくらに取とつきみだい濛町もうちやう。おしやむざんとなげかる、をひきのけく。ヤアく娘むすめ。主君しゆきん少将殿せうしやうてん。御出世ごしゆつせ迄まではみだい所の御ごか

いほう。汝なんぢに任まかする早々はやはや御供仕ごきうじれ。降寂院かうじやくいんは三郎さんらうが亡骸なまがらを。此御山こゝごさんに取とおさめ。跡懇あとこんに巾きんふべしと。しがいを抱いだき立た上あれは。桔梗ききやうの前まへも濛町もうちやうも。ゑかうをなして。別わかれ行ゆ。涙なみだの雨あめの花はなくもり。

無常むじやうをしめす。ひがん桜ひがんざうやふげんざう。妙たへなる御手ごての糸いと桜ざうむすび。とゞめぬ別路わかれちに。名残なごりかずく有明ありさくら単紅たんかうあさぎ。立たかへりてはいざよさらは。さらはくと。招まく袂たもとの墨染すみぞめ桜ざうそでざくら。影かげも姿すがたも隔へだりていく。山桜やまざくらの霧きりに。ほのくこが

くれて別わかれに成なにけり(四十二オ)

第三

己^{地ハル}を貴^{たうと}んで人をいやしめ。君^ウを恃^{たの}んで威^ゐをうばふものは銚^{ほこ}をふむ虎^{とら}のごとしとかや。美濃^ウ近江^ウ両国の按察使^{あせつし}高階^{たか}の右大将^ウ親平^ウは。恋^ウの意趣^{いしゆ}より吉田^ウの少将^{せんせん}を讒^{ざん}言^{げん}し。所領^ウ残^{ざん}らず没収^{もつしゆ}して。猶^ウも吉田^ウの一門^{いちもん}の行衛^{ぎやうゑ}をさがし。後難^{こうなん}をのがれんと心を屈^{くつ}す美濃^ウの国^{くに}。苗木^{なほぎ}の館^{やかた}に近臣^{きんしん}を召^まあつめ日夜^{にちや}にせんぎ^{せんぎ}区^{まぢく}也。

取次^{地色ハル}キの侍^侍罷^罷出^出。御領^御分^分近江^近の国^国鞆崎^{びつさき}八まんぐうの神職^{しんしやく}。御^御ちうしんの義^ぎに付^つ。只^只今^今是^是へと。披露^{地中}に程^{ほど}なく。神主^ウ式部^{しきぶ}松をゑがさし絵馬^{ゑま}をたづさへ。御前^御にさ、げ謹^{つしん}で。御^御らんのごとく此^こ絵馬^{ゑま}に。願^{くはん}主^{しゆ}松若^{まつわが}十一才^{じゅういちさい}と記^{しる}せしは。(四十二ウ)疑

イもなき吉田^{地ウ}の次男^{じなん}。もし御^御せんぎの手^てかゝりにも成^なべきかと。早速^{さつそく}うつたへ候^{こう}と言^{ごん}上^{じやう}すれば。右^{地ウ}大将^{たいしやう}くはんくと打^うながめ。ホ、ウ是^ここそ尋^{たづ}る少将^{せうしやう}が躬^{せがれ}松若^{まつわが}。鞆崎^{びつさき}へ其^{その}絵馬^{ゑま}を奉納^{ほうのう}すれば。彼^{地ウ}近辺^{きんぺん}に忍^{しの}びいるに疑^ぎなし。うろんなるもの徘徊^{はいはい}せは擲^{ちやく}とつて出^ですべし。人違^ウイでも大^{だい}事^じない。必^{かなら}ぬかるな罷立^{ばいりつ}と仰^{おほ}にはつと領掌^{りやうじやう}し。宮居^{みやゐ}をさして帰^{かへ}りける。

折^{地中}もこそ有^あり執権^{しつけん}内記^{ないき}左衛門氏^{ざゑもんぢ}廣^{ひろ}罷^{ばい}出^で。此^御間^ま方々^{かたがた}と落人^{おちひと}をさがす所^{ところ}。駿河^{しゆんが}の国^{くに}にて少将^{せうしやう}の御台^{ごたい}桔梗^{ききやう}の前^{のまへ}。家来^{けらい}松井^{まつい}源五^{げんご}を見付^{みつけ}ケ。我^{われ}働^{はたら}キにてみだい所^{ところ}を召^まとり。源五^{げんご}にも降参^{かうさん}致^{いた}させ。是^こへ召連^{まゐ}レ候^{こう}としたり顔^{かほ}に相述^{あひた}れば。

ホ、桔梗^{地中}の前^{のまへ}を手^てに入^いれるといひ。松井^{まつい}の源五^{げんご}に降参^{かうさん}させ。召^まつれ帰^{かへ}る事^{こと}拔群^{ばつぐん}の働^{はたら}き。此^{地中}年月^{としつき}見ぬ(四十三才)恋^{こひ}にこがれし桔梗^{ききやう}の前^{のまへ}が顔^{かほ}見たし。サアく是^こへ仰^{おほ}にそれと呼^よつたふ。声^{こゑ}をしるべに。立出^{ちだ}る姿^{すがた}の立木^{たてき}里^{さと}なれて色^{いろ}と情^{なさけ}を咲^はき分^わし。花子^{はなこ}も今はぎり故^{ゆゑ}に桔梗^{ききやう}の前^{のまへ}になりふりをうつせばうつす袍^{うらおもて}も裏表^{うらおもて}有^ある身^みの上^{の上}を。若^ももそれぞとしられんかと薄氷^{はくひやう}をふむ思

ひにて。松井の源五諸共に御前問近く畏る。

右大将につこと打参みサテ見事。聞しに増る桔梗の前。其美しい形チに似合ぬどうよくな心底覚有ふ。某が謀計にて少将を

おい失ひしも。そちを我手に入しんため。是こはい事もなんにもないちかふくと招け共。顔を背けて涙ぐみ。コリヤ源五

主の恩を忘れかうさんして自迄。かゝるうきめを見する事。うらめしい口おしい。是でも(四十三ウ)武士か侍か。

エ、恥しらず人でなしと。みだいの思ひ身に受て託歎くぞ誠なる。ヤアかへらぬ諄聞たふない。先達て野上のけいせい。斑

女を呼よせ置たれば。拷問して少将親子が行衛を白状させ首打はたつた今。とても叶はぬふつつりと思ひ切我心に従ひ

めさ。それく源五とくと合点のゆくやう。おくへ連し行いひ聞せよ。君臣夫婦の盃今日一所に取結ばん。早とくくと

有ければ。

サアみだい様お立なされ。ア、さりとはわるい御がてん。今親平公の仰らるゝ、通り。万事はお前に御執心からおこつて吉田の

家のめつぼう。今さつはりと御心に従ひ給は、。惟貞卿のせんぎもそれ也けりに成ルまい物でもない。アレまた泣いて計ござ

つては事がすまぬ。さあく奥へお立くとす、む詞にせひ泣々。花子は(四十四オ)源五に誘れてこそ人にけり。

蔵人立てヤアくのがみの里の名主町人。けいせい斑女を召つれ急いで参れ出ませいと。よばれて出る。八もんじ。おめず場

うてずおぢけなきくかい。する身も恋風は。いつも。廓にこがる、殿を。留木の衣のうつり香も。余所にしられじ白たへ

や。雪の素足の玉鉾に。庭の千草も色失て。花も妬るふぜい也。

申シ大夫さんへ。爰はまあ何ンといふ揚屋じやへ。べうくと取じめもない座敷につくくと。かはつた形なおさんばつか

り。どうも合点がいかぬはいな。コレオ二郎。麿相いやんな。あのまん中なは大尺さん。側にござるが末社じやはいの。ホン
三大きな口舌のあづくやら。皆こはい顔して居さんすと。禿があた口名主町人しいくと旬しかたで笑止がる。

内記左衛門目に角立。ヤイく町人（四十四ウ）共。斑女を召出さるゝは少将父子が在家を御せんぎの為なるに。びろう至極
なこりや何んじや。イヤ是は厚見の藏人様の御内意。お上ミのお慰に成様に。揚屋入のていにて参れと有ルゆへ。あのこと
く長持迄もたせ。まだ替閉も召連お次キにひかへさせましたが。サア此たいこが異者。名は豆蔵と申まして。ヤアばかを尽
しおる。御せんぎの邪魔飛しされと。叱付れは右大将。イヤ内記左衛門そりやかたたい。藏人が物好き時に取ての一興。其
豆蔵といふ替閉。せいは一尺二三寸有ルといふ事聞及ぶ。早く出せと有ければ。藏人はつと承り。豆蔵参れとよぶ声に編
笠手にさけ。赤イ物さてちよこくく。ちよつこりちよつとすはつた豆蔵。目にも入べきふせい也。

右大将遙に見やり。ホ、き、しよりちいさい奴（四十五オ）小人国に生るゝ者は身のたけ一尺二寸といへ共。いまだ日本に
出生したる例を聞ず。おのれが出所はいづくいかなる者。かたちのちいさきには子細が有か語れ。聞んと有ければ。
あらむつかしのお尋や。先拙者めが親父は花のお江戸に隠しもない。照降町の雪踏屋又右衛門と申者。ちと色すじにか、つ
て此豆蔵はかり切にたつた七しやうのかんどう受々。うつらくと都のかたへ趣キしに。大津の町で茶碗酒一ぱいぐつとひ
つかけたが。サア有ふ事の。大事の親の命日ですてとんと打忘れ。ゑびを肴にくふやいな。六尺ゆたかな骸がじつとしま
つてくる程に。目ふる間にぐしやくく。ちよくくく。ちよつぱりといひ此様に成たも道理惣領てなし末子てな
し。我レ等の中に生れたりや。（四十五ウ）中のく小仏は。なぜにせいがひくいぞ。親の日にゑびくふてそれてせい

へ、へ、へ。かふ縮んだで。ござりますと申上れば。せいのひくいは聞へたが。見れば手足も相応にちいさい。イヤこりや
あみ塩辛くふたさかいで。へ、へ、へはれ口賢いやつ。して其様にちいさく成つて何ぞ調法が有かい。アイあの人の骸のちい
さい調法は。おつ取て恋の媒かよはせ文の取遣。此斑女が度々頼んで覚がござんす。行かれぬ所を行が得物。いかにも
く太夫子のいはんす通り。窓からくぐる筈からぬける。鼠穴でも蟻穴でも。穴さへ有ればどこ迄もぐすくとはいる男。
てんてれつくの幫閑じやともてはやさる、はよけれ共。かはひや国本トのか、めか。海老くふた報イとは夢にもしらず。ど
こ(四十六オ)もかしこもちいさふなつたを見おつたら。無力をおとしましよ。是がふびんにござりますと涙ましくら嘘
まじくら。口に任る身の上。かいつまんたるちつくり男。稚子供の持チ遊び。小指の先キに載らる、まめな豆蔵又右
衛門扱ツもまめなが一文と。今の世迄も形チをうつし。父子が名代を残しける。

ハ、ハ、ハ、我カ前共おそれず。幫閑めを相手にあだ口きいて。少将がせんぎを脇道へやらんとはのぶとい斑女。かれがせんぎ
は内記左衛門に申付る。白状せずんは水くらはせよ。豆蔵には酒くらはして慰まん。蔵人其旨心得よいさふれやつと皆引
つれておくに入る。跡にはのがみの町人共せ、くりよつてナント名主殿。あの憎でらしいお根性から。少将様をざんげんし
(四十六ウ)てほつばらい。跡から跡迄せんぎくと。こりやまあどうなる事ぞいの。ハテ天道が明らか。誠有ル少将様は。
追付ケ世に出やしゃつて。終には亡る右大将。物は長ふ見たがよいとそしる後へ松井の源五装束改め。しづくと立出。
コリヤやい。廊の者共そりや何をぬかす。吉田の家につかへ。忠臣と呼れし此源五さへ時に随ひ。古主のみだいい桔梗の
前を親平公の御手に渡し降参したればこそ此如く。衣類大小迄改め時の間に身の出世。御恩の主人右大将殿を悪くさす

る横道もの。赦されぬやつなれ共。今は了簡立てかへれと叱られて。なむ三是も大かんしゃく。重てふつ、と申すまい虫をしづめて下さんせとはうくにげて帰りける。

しづうの様子を長持に伺ひ給ふよしたの少将。たまり（四十七オ）かねて飛で出。源五が胸ぐら取って捨すへ。コリヤ儕が妹の斑女に様子を聞ケば。好んで松井の兵衛が養子と成り。一旦此少将へ忠義と見せ。右大将に降参し。よつく桔梗の前を渡したなあ。割でも飽たらぬ人畜めと。指添ぬいてさや口に。ぱつしくと打すへ怒の涙にくれ給ふ。

御、御腹立は御尤。妹斑女がもとへ書通にて我身のうへを申やり。それより御台所の御供申。君の御行衛を尋ため。東国へ趣き。しさいござつて降参と。聞もあへずナン子細。今迄此少将は斑女がせわに成。のがみの廓にかくれ居る口おしさに。あの長持に忍び入り右大将に近よつて。一たちうらみ鬱憤をはらすかくご。手始メに儕をと切かけ給へはかいぐり。

ア、是々聊爾なされなど。あしらひかねて見へたる所へ。

是（四十七ウ）待て下さんせと。奥よりかけ出る顔と顔。少将さんお久しや。ヤア花子そちや何として此所へ。サイナ。

わたしがきたも源五殿の降参も深い思案。桔梗の前様とはわたしじや。ハテ此花子がこつちやはいな。ヤ、とは又どふしてサア。誠のみだいはわたしが母の蒞町へ預け。聞へた。扱はそちを桔梗の前にして入込。右大将があ首を。シイ高いく。御疑いはれし上はいさい申に及ばず。扱おおくにて承れば。豆蔵と申す幫閑は。則チ是なる花子殿の兄。吉田のお家の竊の役人。いがの平次が為には孫。竊の術にて形をちいさく見せ。是へ参りしも敵に心を救させん謀。門内よりじゆうに出るはいが流の竊の妙術。ひそかに彼を召つれられ。先々此場を立のき給へ。アらくおくは酒宴の最中。豆蔵をはずさし

(四十八オ) てどふぞ爰へ出したいもの。人音せば我君は。もとの長持へ忍ばせ給へといひ捨おくに入れは。

花子の前は少将の。御手を取て涙ぐみ。野上の廓へ売渡され。はん女さんに廻り合イ。勤の内にぎりが出来。少将様の事ふつ、りと。

情。身にしみく、と忘れず。今お目にか、つたとて。何シのせんない身のうへと悔。歎ば。

思ひ切ふといふてのけて。桔梗の前が代りにたつたそなた。花子ではない此少将がみだいい様。赤らむ顔は恥紅葉。てもちぶさたに見へければ。

つく後に斑女。ハアひよんな所へきたそふなど。いふに二人ははつと計。赤らむ顔は恥紅葉。てもちぶさたに見へければ。

け句と。わしが了簡すりやすむじやないか。イヤもふ其様に了簡ごがしでいたためず共。まあ一通りを聞いてたも。いつぞや

の騒動に不破の関を。右大将がけらい武者之介が固し故某が一生けんめいの場所を。此花子が働キにて漸のがれて。又もやのがみの里に忍び。けふ迄斑女そなたに添っていたは。是皆あの花子が影と思ひなをして。ちやつときげんなをしいの。

イヤなんぼどういふたとて斑女さんの。よもや誠にさしやんすまい。是からきつと改めます。元来わたしがか、さんは吉田のお家の御けらいすじ。御台所へぎりがた、ぬ。少将さんと縁きれとかたい言付。思ひ切れば母様への孝も立。斑女さんへの

ぎりもたつ。モ、、せいもんくつされ今改め。殿さんに暇を取た証拠に(四十九オ)は。詞をもかはすまい。是にちがは、古郷のと、さんか、さんを。生キながら奈落へ沈める法も有れ物いふまい。疑イはらして下さんせと涙と共に侘ければ。

ア、是、わつけもない事計り。此斑女が御本さいといふではなし。勿躰ないせいごん立テ。イエくそれでも少将さんにつな

がつてはわたしが心がすまぬはいな。とにもかくにもうすき縁。ぎりにせまつてちり行ク花子が身の上を。思ひやつてと計中にてふししづむこそ道理なる。

切地色ツなる思ひに少将もや、打しほれおはせしが。はつと心を取色なをし。所詞こそ有レよしなき事に隙どつて。事あら顕はれなば先せん非ひをくいてもかひ有まじ。右地カ大将が首とるか。我うたる、か互イのうんづく。遁のがじ物と身づくろい。かけ込色込給へは。ア、是申。まあく待ッつて下さんせと。斑ウ女花子が声々に。あやうさ(四十九ウ)こはさ我レ先キに。跡をしたふて三重へおく深さ。館地ウを遙はるかのきのつま。白ちが芽やふくてふたか楼どのに。竹ちくりん林てい亭と額がくを打チ。庭に一は色しきに打はへて。樹じゆ木もくを交まじぜり竹。ゑだは榮さかてせいくと。いくよを込メし千尋ちごうのかげ。此ハル君と名付ケ愛あいしたる王子わうし猷けんが樂たのしみを。爰フシにうつせる酒宴しゆまんの興けう。

たいこ禿かたうも酌しやく取ク々。お髭うひげのちりとる蔵人が。爰ウでこそ御なぐさ慰なぐさと。大盃ハルを御前にすへさせ。恐おそしながら是にてひとつ召上さしられ。豆蔵まめくらめに下されなば。有がたく存べしと。申上まへれは右大将。快こころげに打う点ちんき。ヤ詞豆蔵。我オれも数盃すばい傾かたむけたれ共此盃こゝて今いま一ひとこん。サ地ハルアツづけくと丁ど受うけてつ、とほし。ソハルれくれる吞のおろふ。ハハルット頂てう戴たい是はく。めうが至し極ごくもない有がたい忝かたじけないひたいが。ちつぽけな此かた骸た。大かた酒のはいる積つちが有ル物。どめつそふな大(五十オ)盃。中へつかつて行水きやうせふ事はしらず。是でのもんでたまる物か。ホ、其たまらぬ所が我君の御なぐさみ。コ地カリヤ蔵人が酌しやく小言こごはいはせぬ色コレハ迷めい惑わくと詞いふも無念口おしい。ア、ま、よやつてくりよと。引ひうけてぐつと一ト息いきてつべ色いびつしやり。ホ詞ウ扱あつてもこたへるは。こたへる所でそれ着まか。用意もちの大う蛸たこさし付けれはほいと飛とのき。コ詞リヤどうじゃ。ゆでくたの蛸たこ坊主ぼうず。こりや手にもつても戴いたず。いつそ天窓あまへかふかづき。まつかにゆでたる法師ほうし武者むしやは。龍宮城りゆうきやうじやうにかくれもなき。木こりのりつしと申ますもの。い

で〜御前で一さしまはんと。扇ひらいて立たる後へ。

君のひさうの虎毛の猫。ちよいと飛付、蛸ひつくはへて。逃るをやらじと豆蔵が。つゝいておくにかけ入れば。

有合フ人々あれ〜。それ〜（五十ウ）そちらへ隠れたにげたと騒うち。猫はお庭へかけ出て蛸を大事にかくれんと。竹のしけみに飛こむ向ふへ豆蔵が。によつこりによつと頭れ出。こりやく〜。ありやく〜と引つ。しやくつ。

こぶしをかため。はつしと打テば口あんごり。サアしてやつたと蛸ひつたくり。竹の枝に打かくれば。透さずかくる猫の前足両手に取てゑい〜と。捻合もみ合へいどみしが。透をうかゝい。猫はちよろりと蛸ひつくはへかけ出せば。なむ三しおつたどうずりめ。いづく迄もと大手をひろげ追てゆく。人々どつと打笑へは。右大将眉をしはめ。ヤア蔵人。あのごとく

ばかつくす豆蔵めは。正しく伊賀流の竊の者。少将にかたんし。此親平を討ん方便と覚たり。駈出して搦とれど。座を立おくに入れは。（五十一オ）

厚見ノ蔵人下部に下知し。さがせ〜とよばゝるにぞ。かけ入〜打合イ切合フつばおと刃音トヤア編笠すつぽり赤い物きたちよつぽりめ。遁すなやるなど尋さがせはちよいと乗たる石どうろ。イヤ高上りはこつちのかつて。串刺にしてこませと。左右一度につゝ、かくる。鍵のしほくび両手に握。じつと上ればぶら〜。ぶらりとさがる下部がおもり。釣合イかね合ちがはぬ豆蔵。造付たることとく也。エ、めんどうなつくねめら。おもりに成つた返報に。一々暇とらせんと。ひらりと飛ンだる軽わざ早わざ。手なみにたまらず下部共。むら〜はつと。逃ちる所へ。

おくより少将かけ出給ひ。ヤア〜汝は花子が兄の豆蔵なるか。ハテ拙者が身の上はおつての事。君御忍びまします事。敵がし

らぬは是^{こゝろ}究^ま(五十一ウ) 竟^ま。しづうは最前源五にしめし合せたり。はや御出と引立^うく裏道^{うらみち}さして落^おて行^いく。

花子^{はなこ}の前^{まへ}はきもわくせく。少将^{しょうしょう}様斑女^{はんめ}様。此間^{こゝ}に早^{はや}おとしたいが。どこにござると尋^{たず}る所^{ところ}へ松井^{まつい}源五^{げんご}。花子^{はなこ}殿^{どの}。少将^{しょうしょう}様は豆蔵^{まめぞう}がお供^{まけ}して早立^{はやたて}のいた。サアこなたも早^{はや}ふにげた^く。イエわたしよりまあ斑女^{はんめ}様を。ハチさてこなたにみぢんけがで

も有^あつては。みだい様へ此源五^{こゝろご}が言^い訳^{やく}た、ぬ。とかふする間^{あひだ}も危^{あやう}とせり立^たられ。小づま引^ひ上^あげおび引^ひしめ足^{あし}もしどろに走り行^い。先^まはあんど是^{こゝろ}から何^{なに}とぞ妹^{いもうと}をおとしやらんとふりかへれば。お^くより逃^に出^でる斑女^{はんめ}をおつかけ右大将^{みぎだいしょう}。内記^{うちき}藏人^{ざうじん}引^ひく

して出来^きり目^め通^とりへ引^ひつすへさせ。ヤアにつくき女^めめ。桔梗^{ききやう}の前^{まへ}豆蔵^{まめぞう}を落^おしたは皆^{みな}儕^{せい}がわざしやな。藏人^{ざうじん}は兩人^{ふたり}が討^うて手^てに向^むへ。(五十二オ) 松若丸^{まつわが丸}が隠^{かく}家^がは大^{おほ}かた江州^{えしゅう}鞭崎^{むちざき}の辺^{へん}。三日^{さんじつ}のうち^{うち}に名^な乗^りて出^でずんは。斑女^{はんめ}を殺^{ころ}すと諸方^{しよほう}へ高札^{たかざし}を立^たさせ。

鞭崎^{むちざき}の社^{やしろ}へ直^{ちき}に向^むつてせんぎせん。内記^{うちき}源五^{げんご}。けいせい斑女^{はんめ}をひつ立^た来^きれと。下知^{げち}に随^{したが}ふしはり繩^{なわ}か、るうきめに逢^あ事^じも。夫^{つま}と我^{われ}子を跡^{あと}や先^まき思^{おも}ひ。廻^{まわ}せば危^{あやう}さの。胸^{むね}もはりさく悲^{かな}しみに。ひま行^い駒^{うま}や鞭崎^{むちざき}の社^{やしろ}を。さして三重^{みへ}へ急^{いそ}ぎ行^い

さんけく六^むこん罪障^{ざいじやう}。おしめに八^{はち}大金剛^{だいこんがう}どうじ。一^{いち}に礼^{らい}拜^{はい}大靈^{だいてい}ごんげん。本^{ほん}地^ぢは大^{おほ}日^ひ。ふじはせんけん。なむ婦命^{きめう}大^{だい}菩薩^{ぼさつ}。さらくくといら高^{たか}殊^{じゆ}数^{すう}。ちり、んちん鈴^{かね}ふりならし。

七^{しち}なんそくめつ家^け内^{うち}繁昌^{はんじやう}えんめいと信心^{しんじん}。けんごの富^{とみ}士^し同行^{どうぎやう}。思^{おも}ひ近^{ちか}江^えの山田村^{やまだむら}三郎^{ざぶらう}が庭^{にわ}の一^{いち}ト木^き。杉^{すぎ}にしめ繩^{なわ}高^{たか}々と。念誦^{ねんじゆ}の声^{こゑ}も殊^{じゆ}勝^{しょう}也^や。

勤^{しん}メおはれば先^ま達^{だつ}の次郎^{じらう}兵衛^{べいゑ}法^{ぽう}印^{いん}。(五十二ウ) ノウいづれも。ふじごんげんの御^ご利^り生^{せい}。有^あがたいとは思^{おも}はしやれぬか。此^{こゝろ}国^{くに}のひらが嵩^{たけ}の大^{だい}天^{てん}狗^く様^{さま}。毎^{まい}日^{にち}富^{とみ}士^し禪^{ぜん}定^{ぢやう}なされ。下^{した}向^{むか}の節^{ふし}はいつでも。此^{こゝろ}杉^{すぎ}の木^きに。暫^{しば}クお休^{やす}みなさる、と昔^{むかし}からの語^{かた}りつた

へ。それ故に此木を。羽がよい休めの杉といふ。イヤはがよい休めのついでに。休んでいらるゝ是の三郎は。此月当家でいながら。持病とやら作病とやら。起られぬが定かいの。ホンニそれよ。どんなこつちやおじや見てこふと。いふまもなんどののれんおし上ヶ立出る。

主 山田ノ三郎。コレハくもふお仕廻か。けふは当国の御領主。高階の右大将殿鞭崎の社へお出。公用すじで呼にきたれ共。

姑 ばさまを代りにやり。垢離を取て勤ふと思ふ内。持病のづゝうでこまつた所を此ごとく。頭巾すゝかけを戴いたりや。さつぱりとさめまし(五十三オ)た富士ごんげんの御利生で。雀目さへ直つた貴様。づゝうぐらひは手間隙入ルまい。其上におみきをやつたら猶よかる。市松早ふ。アイと立て廣庭の。杉に供しみきどくり。茶碗をそへてさし出せは。

三郎 いたゞきずつとほし。先達にさしければ。ドリヤ戴こかい。扱つてもうまし。ソレ作左へ廻しましよ。ヨット、、、、。こぼれるく。ハチこな市まはつよい酌じや。ほんに強で思ひ出した。腹は立られな御ていしゆ。こなたも力をつよいを鼻にかけ。人を恐れぬ人かい商売。おとに聞へた悪者で有たか。此はる富士禪定しられてから。おけな物打明ヶたやうに。けつかう人シになられたは。ふじごんげんのお影ぞよ。ヨット最一盃。逆の事に。徳利にもんどりうたせい。イヤ是作左。こな計有難がつて。こちとは何を戴(五十三ウ)こぞい。ナント市ま。そこらにふり残してもないかい。サアみきでは足まいと。か、様はやぶぎはの酒屋へ。ヤア何シじや買にか。こりやうまいと。咽をならして待所に。表へどしくそりや登。酒じやくといふ所へ。村のあるきいきせきとかけ来り。コレく御ていしゆ。お尋の松若丸。三日が内に名乗て出ねは。母親の斑女を殺すと有ル。方々へ高札を立られ。それに付いての御せんぎに。姑を名代に出しておく山田ノ三郎。急に連れてこい

との仰付られ。鞭崎むちざきの社迄ちやつちやとござれ。ホイそんなら同行衆おりや行ます。爰こゝでゆるりと遊あそしやれ。市松いちじくよふるすせい。イヤと、様。とらはれのはん女様の為じやに依よておれもいきたい。何を訳わけもない。きづかいせずと内に居い。追付おつか、も戻るで有ありと。いふまもある(五十四オ)きにせり立られ。鞭崎むちざきさして出て行。

ナント何いづれも。吉田の少将殿の。ゆかりのもの、御せんぎで。もやつく事じやないかいの。どうでも三郎は。人かいをしやつたによつて。お尋もの、事といへは召出まする、。イヤ忘れぬ先まきに。掛銭かけせんのさいふ渡しておこ。けふのおみき代を引て。残つて六百五十文。此通りいふてたも。おくの戸棚とどなか。お前まへの下へ入いれておきやと。市松いちじくをおいやつて。サア誰たれもなければ。講中密むちまに。言合ことあせておく事が有あるとさ、やく声を。戻もりか、つて女房にようぼうおくま。何事なにごとやらんと門口かどに聞共きこしらず。

先達さきだち講中むちまに打向うちむかひ。サテ富士のお山伏やまぶし。降寂院かうじやくいんが。岩間寺いはまへ参るとて。けさおれが所へわせたによつて。是の三郎の身の上を咄うしたれは。お山伏やまぶしもきつい驚おどき。ホニホニそれよ。此春裾野このはるすそで。降寂院かうじやくいんに切き(五十四ウ)殺された山田ノ三郎。蘇よがてこち

とより先まへちやんと。戻もつていた時のひつくり。今に合点あてんがいかぬはいの。イヤ惣おんたい富士禪定ぜんぢやうして死しんだ者は。連つれより先へ戻り。三年づ、生なきながらへている。此事このことを同行の外ほかカ。親兄弟かたにも。堅かたふいはぬがお山の誠まこと。三郎さんらうがしがいは。百里ひゃりあなたのおふしの山やまに有ありながら。内へ戻つて三年が間まは。女房子にようぼうにそふていれ共。それを過ると。風かぜに灯ともしふきけすことく。影かげも形かたちもなつかりけり。何なにとあらかはれぬ。きずいじやないかと先達さきだちが。語かたるを立聞たてきくつまのおくま。扱あは夫とは先だつてもはや此世このよになき人かと。思おもへは有ありにもあらればこそ。おなし思おもひを立涌たてわけの。暖廉のれんのかけに市松いちじくが。俱ともに泣な共。歎なげく共。

しらぬ同行口々に。イヤ先達殿。ふして死んだ者は。お山での事は何もかも皆忘れ。もどるのに。(五十五才)裏からはいつて笠をぬがす。白の上にこしかけるげな。それで白にこしかけな。内で笠きぬ物しやといふが。何シと三郎もそふで有つたか。おかたにとふて見まいかい。アレまたあほう計。それきかして。女房子が泣出したら忽消る。一旦死だ三郎じやといふて。かんまへてこはがりやんな。此白装束は忝くも。行衣と名付て。背にふじのお山をかき。かふきた所が。すぐにあなたに籠っている心。狐狸の見入レものき。瘡病でも熱病でも。いたゝかすればさめるがふしき。ヤアさめるついでにおみきも醒た。此おかたは遅こつちやの。ヲ待遠にござんしよと。徳利さげて内にいれは。

エ、イおくま女郎お帰リか。三郎は鞭崎から。公用すして呼にきていかれた。ドリヤ立酒に呑ふかい。エ、(五十五才)立酒とは氣にかゝる事ばかりと。いふに講中取々廻る盃に。きげん上戸の声そろへ。さんげ酒は六こん廻つた。にしめに初茸こんごりどうふ。一に大事はふしのせんさく。なむきめうな事いふな合点かがてんと。衛足打つれへ立て帰リける。

息子の市松おくより出。か、様戻らしやんしたか。此さいふは講中のかげせん。預つて置ました。ヤア大事のもの渡しましょと。さし出せば手に取て涙くみ。ハツアせひもなや。誰レ有ふ吉田少将。藤原惟貞様の公達。松若丸様。代か代ならばたとへ金銭銀錢でも。御ン手にふれさせ給ふべきか。今我レ々が此貧ひ中で。育上りましたれば。見るを見まねにあられもない。何シの儂な此かけせんを。大切な物じやとさもしろい今のお詞。お心根が思ひやられて痛い。氏より育と(五十六才)いふたとへも。御身の上か浅まじやと。お主思ひのしんじつしん。涙は詞に先立り。

イヤなふ内義。西も東も弁へぬ時から。母斑女様の手を離れ。そなた衆の介抱で成長たる此松若。其やうに大切に思ふて

たもるに付ケ。今三郎の身の上を。同行共か咄はなしに聞ておりやかなしい。エ調、すりやおまへも夫トがふしのすそので。

サア山伏地色中に殺さりやつた事残らず聞たハア。はつとより外詞なく。主従顔を見。合スエテせてしばし涙にく中れけるが。

イヤ申シ松若様。今お聞なさる、通りじや。必々夫トがお山で。死しなれた様子おつしやるなへ。若も形かたちがきへうせては。誰誰

有ツておまへを見育そだて。御代に出しませふ。わしやいつ迄も三郎殿を。此世ウにとめて置たいが。三年と限かぎた身のうへ。ア、あ

ぢきないうきよやと又オツシむせ。かへり泣いたる。

折地色ウふし(五十六ウ)表に夫トが声。女房共戻つたと姑しうとめ諸共立帰り。エ調、ついおれがいけばすむ事を。いとしなげに婆ば様をや

りまして。つ、ぷりと夜に入ハルり迄ささ撫な御たいくつ。イヤ気がはつて有レば。たいくつな事はないが。松若丸を髻むす三郎が。かくま

い置たかとのせんぎにあふて。間地ウに合ハルいのうそ八百もぐどくと跡あとや先さきキ。所所へ髻むす殿が見へて。まんまと右大将たばかを喋たり。罷

りかへれで事ことすんだ。ヲ調、でかさしやつたこちの人と。お熊くまが悦よろこび三郎は。松若丸を座上じやうじやうになおし。今晩こんばんのせんぎ。いぶせく

も思召れんが。敵右大将。疑うたがいがはれたればこそあれ。向むかひに見ゆる鞭崎むちざきのちん座敷で。あのことき遊興ゆうけいと。聞きよりおくま

が申まをシ若君様。わたし調が引ひキ舟勤ふねメていた時より。聞覚きこし斑女様の爪音つまね。ヤアこりややくたいもない(五十七オ)事いふな。

あれは神主かみぬじの召使めいしイの女子共と。若君わかしに歎なげキをかけじと。いひ紛まらせは母は心得こころえ。ホシニ外とから行いケば四五丁も間まタが有あふが。

裏うらから裏へは程ほどちかふ。テモ面白おもしろい琴ことのしらべ。歌聞うたキながら若君とねさせませふ。おくま門かど口ぐちよふしめて。アノ髻むす殿とよふ

しめて。深かよなべしやんなと。老おきなの戯たはまめやかに。松若君の御手ごてを引ひ一ひと間まにこそは入いにけり。

サア地色中くこちの人寝ねよふじやないかと押入おしレしより。枕まくらふとんを取と出だせば、夫トは戸口かどぐちに錠ぢやうおろし。ヤアそなたから先さきへねやと。

たばこ引よせ思案顔。コレ三日過れば斑女様のお身の大事に及ぶ。それをとやかふ苦にしてかいの。ほんに何から何迄此様に。気にかゝる事はないと。夫トのそばに寄りそふて。いふにいはいれぬ心の悲しさ。そゝろ（五十七ウ）涙にくれければ。おくま。そちは何シで泣ぞい。さればいな。松若様かくまふている事が敵へ知したら。御幼少な若君に。年よらしやつた母様。わしや七月で次第くしだいに身もおもく。お前をひよつと先きだてたりや何シとせふと胸にせまつて。どうも身もよもあらぬとわつと計りに。声立て。むせび歎くぞ不便也。

爰な者は未練な。一旦いひぬけた松若君。御代に立る迄はいつかなく。大切な三郎が此骸。風ひく事でもない。氣づかひしやるな。ム、そんならお前は。今から三年過キても。やつぱりいつ迄も。まめで居て下さんすかへ。ハテかはつた事に念入る。三年は愚百年でも千年でも。お主の御せんとを見届る迄は死んではならぬ。訳もない案じすごし（五十八オ）しやんなと。咄す内にも氣くたびれ。枕かたむけとろくくと。

寢入ればお熊は猶涙。さつきに講中の咄を聞いて。何かに氣を付ケ見れば見る程色も青ざめ口明いて。便りないあの寝顔。ふじの山で死んだものは。権現様の御利生にて。お山での事を皆忘れ。内へ戻つて三年づ、は生きていると、同行衆のいはしやつたが。裾野で山伏に殺されさしやつた。我身の上をとんと忘れて。お主を御世に出す迄は。たとへ百年でも千年でも。生きながらへて居ると。なんぼ慥たしかにいはしやつても。こなさんの骸は。ふじのお山に死でじやはいのふ。此様子を母様の聞カしやつたら。年寄の苦にやんで其歎なげキはいか計り。三年過れば風に灯ふきけす様に。骸も影も残らぬ。其時の（五十八ウ）悲しさを思ひ廻せば。世の中のあぢきないといふに。是に上うこすあぢきない。はかない事はよも有ルまじ。富士ごんけ

んの御利生で。おなかなかや、と諸共に。此身を代りに取殺して。夫との命をいつ迄も。延はらして給はれと。叶はぬ事をかきくどき。きへ入ル計り正だも泣沈ナラシシツビこそ道理なれ。

あじきなき身の気もつかれ。夫との傍に寄そいて。袖をへかたしき伏居たる。

松若丸は寝所をぬけ出。おくまが歎きを聞クに付ケ。身の悲しさは弥増り。

遙に見れば鞭崎のちんのしやうじに。琴をしらぶる女の影。あれが母の斑女様か。此松若が名乗て出ねは。三日が内に殺

スと聞て。何ンと見ていられふぞと。こなたの歎きにつま琴の音。色もいと哀げに。ひよく連理のかたらいなせし我つま

の。秋より先きに(五十九才) 必と。あだし詞の人心。父少将様の事を。思ひ出してあの一トふし。母様に違はない。三

郎夫妻がねやつた此間に。自身に名のつていかふか。イヤく。爰に幸イ硯がある。母様を助けてと敵のみうちち。頼む目

当は松井源五。文認ても誰レにとゞけて貰ふぞ。そなたの空よと。詠ムれはそれぞとといし。人もなし。申母上。おまへ

の命助に。早ふ行きたいなのつて出たいと。いふて油断せぬ三郎夫婦。表の戸には錠おろす。ハッアどうせふな。よしや。

思へは是とでも。逢は別レなるべし。世をも人も恨ムまじ。我身のほどを思ひつゞけて只独。明しくらすぞ。かなしき。

悲しうなふて何ンとせふ。どうぞ手が、り便りはないか。ヲ、思ひ付イたり。それよくとさし足。ぬきあし延上り。

かけたたる(五十九ウ) 弓矢おつ取て、なんぼ敵に降参しても。松井ノ源五は忠臣と聞及び。頼んでおくる此矢文。所も鞭崎

ウ矢神の恵にて。母の命を助ケ給へと心中に祈念して。引しほり切つて放せばねらいをたがへず。右大将のおはしますちん

ざしき。障子の内へ射込だり。

嬉しやくくと。杜のかたを伏おがみ。産の母上父上は見ずしらず。十一に成ルけふの今迄。飯にもと、様か、様とて。育られた夫婦の衆に。別る、のが悲しひ。せめてねがほに成と暇乞と。屏風の内をさし覗きこへも得立ず歎る、。御心根ぞ痛しき。

いつ迄名残を惜んだとて尽せぬ別れ。母様の命助に行。跡で必叱てたもんなや。此年月の恩も情も忘はせぬ。是今生の別れぞと。思へはそゞろにかなしざつらさ。夫婦が寝所老（六十オ）母がふしど。あなたこなたに暇乞。せんかた泣々せんざいの。やぶ垣こへて脇道よりとやたけにはやる。稚心のぼれはめきつく。垣の外面に声立て。怪み吼る里の犬。こはげもなげにひらりとおり。前後にかゝるをするりと抜いたる小脇差。切はらい打はらい鞭崎さして急る、。

跡にはふつと目さます三郎。犬の声に聞身立テ。つまを起せばなんと口より母もかけ出。コレく智殿おくまもおきや。若君が見へ給はぬ。松若様がござらぬはいの。エ、と驚き夫婦はうろく。お心さとき若君。母御の命助ケんと敵のもとへ。なつてお出なされしかと。戸口を見れば錠は其儘。そこよ爰よと三人がとはうにくれて尋る所へ。

表にあまたの人音。門の戸けわしく打叩。ヤア（六十ウ）山田三郎。右大将親平公より。お尋の松若丸をかくまい置いたるよし。矢文をもつて自身のうつたへ。主君右大将の命によつて。松井ノ源五兼俊むかふたりと呼はるにぞ。物に動ぜぬ三郎もはつと仰天。つまと母心をちぎに碎は門の戸めりくくとつたくと込入ルを。かたはし摺で打付なげ付はり飛す。手なみにおそれにげちつたり。

源五さはかず四人駕かき入らせ。ホ、き、しに増る三郎のはたらき速く。ヤアおさめ過きたる源五。見ぐるしき茅屋な

お供にかけてはならぬ。跡は貴様に任まかせおく必かならずふかく取とルまいぞと。お地のが臆おくびやう病びやういひくろめ。気たましいも内うち記し左衛門ざゑもんけらい引ひぐしにげかへる。

源地五は立たて身み繕つくろひ。若詞君きみを隠かくさる、と疑うたがひし段だんゆるしておくりやれ。夫婦ふうふの衆しゆ諸しよ共とも我われレ々兄弟にい一所いっ所に。御ご供くして立たのかんと思おもひし所に。松地若わ丸わ敵てきの擒とりことなれしと聞きからは。右右大将だいしやうか美み濃のうへ帰き国こくの跡あとをおひ。鋒きつさきのつゞかんだけ。切きつてく切きちらし。たつた今いま伴ともなひ帰かへらん。ア、暫しばク待まちれよ。荒あ氣きをもつて取と戻もどさは。却かへつて松地若わ君きみの御ご命めい危あやうしく。右右大将だいしやうの上うへ意いに任まかせせ。某あつが首くび(六十二ウ)打うて敵てきに心こころを赦ゆるさせ。松地若わ君きみをばいかへす所しよ存ぞんはなきかと。ゆ地ううきはげしき三さん郎らうが。打うてかへたる一言いちごんに。源源五ごもはつと思おもひしが。さはいへ忠ちゆう臣しんの御ご辺へんを手てにかけ何なんシと討うれふ。イヤ忠ちゆう臣しんでない其その訳わけは。当はる春はる三さん月げつ。隅すみ田た川がはら原はらにおいて。扱よほどころなき間ま違ちがひにて梅う若わ丸わを。手てにかけし人ひとかいは此こ三さん郎らうと。な地のはれは源源五ごくはつとせせき上うへ。ヤ詞扱あは梅う若わ殿でんを手てにかけた。人ひとかいは汝なんぢで有あつたか。それときいて我われら兄弟にい。しらず顔かほにすましては御ご台たい所しよへせり立たたず。梅地若わ殿でんの御ご敵てき初しよ太た刀たうを打うて妹いもうとと。指さし添ぞぬいて投なげ出し。後ご話わは此こ兼かね俊しゆんと。励はげます兄にいの一言いちごんに。斑い女によは拔ぬ身み手てに持もつながらむむせび入いり。わらはが産うだ松松若わ丸わを。育そだてもらいし三さん郎らう夫ふう婦ふに。久ひさしぶりで廻まわり合あひあいにぎり有ある。梅梅若わ君きみ(六十三オ)の敵てきじやとて。何なんシと手てにかけ切きれれふぞとかつつばとふして歎なげるれは。

お地くまは猶なほもおろくく涙なみだ。斑い女によ様さまのお手てにかける敵てきは愛あいにと。抜ぬ身みもぎ取と我われ腹はらへぐつと突つ立たつ。梅地若わ様さまの御ご敵てき。人ひとかいの山やま田たノ三さん郎らう思おもひ知しれと。あ地ぐれは人ひと々々こは何なんゆへと。驚おどきさはぎ介か抱はすはは。エ、いはれざる女によのさるぢへ。此こ三さん郎らうが種たねをやどして早はや七しち月げつキ。殊ことに左ひだり孕ばらみ。懷くは胎たいのなんしを。我われ代しろりに殺ころし敵てき討うをすまし。うちわのぎりは立たつつにもせよ。右右大将だいしやうに心こころを赦ゆるさ

せ。松若殿をばいかへす謀はかりごとには。三郎ウが首ハルとらずんば叶かなまじ。此こばの哀あはれを聞きて源五源五。氣きおくれして手てがた、ぬか。但たゞしは腹はらへつ、込こふか。眼がん前ぜんに梅若君梅若君の御敵ごてき。切腹せつぷくさせては武士ぶしが立たまい。討うツか。うたぬか何なにとじやと鑢つばとくつろげ。のつびきさせ（六十三ウ）ぬ覚悟かくごのてい。源五源五も今は辞はなするに及およばず。主君しゅくん梅若丸梅若丸の敵てき。恨うらみの刀受かたなとれと。ひらりとぬいて後うしろに廻まわるを。コレコレのふ待まちつてと手ておいの女房にようばうが。とゞむるかいもあらかなしや。首かしらはあへなく落おにける。

直ちよくに器うつはに取とりおさめ。ヤアヤアく老母らうぼ。我妹わが妹諸共しよご手ておいをよつく介抱かいほうあれ。某たれは此首こゝろを以もて。右大将みぎだいしやうを欺あざむき松若君まつわがきみを。ばいかへさんと行いをととめてノウ源五げんご様さま。やうす有ある夫トおとの身みの上うへ。今いま一ひとつめ首かしらに各残おのづかが惜おぼたいと。歎なげき顔かほへは。ララ、心こゝろせかる、折おかなれ共ども。名残なごりおしいは理ことわりと。首かしら桶うけ明あければこはいかに。首かしらにはあらず。ふじ禪定ぜんじやうの行衣ぎやういの片身かたみ。血ちまぶれに成なてあるとあきれ。はてたる計也はかりごと。

お熊くまは切せつなき息いきをつぎ。ヲヲ、其筈はづく。さつきに同行衆どうぎやうしゆの嘯はなにきけば。此春こゝろふじ禪定ぜんじやうの（六十四オ）の時とき。降寂院かうじやくいんといふ山伏さんぶつに。殺ころされた三郎殿さんらうだんなれ共ども。ごんげんの御利生ごりせいにて。一旦いつたん死しだ我身わがみの上うへは忘わすれて。此三郎こゝろが首かしら討うて敵てきを欺あざむけと。源五げんご様さまにいはいしやつた。其時そのとき様さま子を明あしてとむれば。忽たちチ形かたちが消きると聞きク。所詮しよせんおなかなかや、と諸共しよごに。主ぬしのかはりにわたしが死しンで。三年さんねんが間ま々々成共なりとも。夫トおとを此世このよにととめおかんと思おもひしに。其そのかいもなき身みの成な果は。

是こゝろといふも松若まつわがきみ様さまを。養育やしよくするに貯たくはなければ。ひんくをお目めにかけまいと。人商人あきんどの仲間なかまへ入り。おほくの人の子こを勾引かどわかし。うきめを見せたる人の恨むじが身に報むじひ。梅若丸うらわがきみ様さま共どもしらず手てにかけし。主殺しゅころしの山田やまだノ三郎さんらうは此こおなかなか子こ。先立まッ夫トおとはむかしの本名ほんなのがみの藤太ふじた。主殺しゅころしてはないぞへ。かふいふもおしつけがましい事ことながら。死し後ご迄いたの夫トおと（六十四ウ）の悪あく

名を。どうぞ遁してしんぜたいと。思ふたとてかんじんの。松若様を右大将に。生どられたれは何を功に。少将様やみだいな様へお侘申さふ。因果な夫婦が身の成行。哀れと思し召れよと。悲しさつらさをかぞへたて。歎く涙はほどばしる。血汐に染みて日の出の海ひざにたへしごとく也。

母は手おいを身にそへて。出かしゃつたく。夫との代りに命を捨。悪名を通れさせんと。けなげな心が嬉ふて。是見や涙もこぼれぬが。残お、いは孫が顔。一ト目も見ずに殺すが可愛ひ。なむあみた仏とゑかうする声に哀ぞこもりける。

源五も歎キの涙をとぐめ。神妙く。主君少将殿の御前は。某宜く取なさん。首はかたみの此行衣にかはれ共。しがいはいかにと引立見れば着物計。軀にあらで(六十五才)是も同しく片身の行衣。各是はと又恟。かゝるふしぎも誠有ル。夫とのちしほに染ミたる行衣。片身くを一ツによせ。母と源五が取々に手おいの肩に打着すれば。

斑女御前も涙ながらにフウおくま。少将様の自に給はつたる此扇。形チはふじに喩しもの。夫ト諸共すそのにて。一所に死ると観念しやと。ひらきし扇を逆に。見すれはいまはの目をひらき。ア、有がたき御す、め。扇の形チを逆に。見れは其儘ふじのお山。あのすそのに夫トのしがいは有ル物を。魂成共したい行んと思へはわしや嬉しいが。跡に心の引さる、は。年よらしやつた母様の事。御見捨下さるな。皆様頼ミ上ますと。いふ声も早たへぐに。命はふじの薄煙きへて行身ぞ哀也。

人々しがいにいだき付わつと一度に声を上。歎き沈し折こそ有。俄に一天(六十五ウ)かき雲。どつと吹きくる天狗風。杉のしげみにさつくさ。どろくどつと動揺すれば。

人々地ハルはつと仰天うづてんし。見上る梢こずへにすつくと立たつたる異形いぎやうの姿。ときんすゞかけまくり手に。若君こわきを小脇こわきにかい込こみ。ヤア調く松井地ハルノ源五。松若丸をばいかへし是迄ともなひ伴来ともなひつたり。はや受とれといふ間も嵐ウに漂々へうくぜん然と大地ツクリにへおり立

渡地ハルせばはん女は我子の顔。見る嬉しさといふかしさ。夢ワソに夢みしごとくにて。

さしもの源五地ハルもはつと敬うやまひ。主君調松若丸のなんぎを救給すくひはる。飛行じざいの貴僧きのふるまい。さつする所当国だひらが嵩たけの大天狗。イヤ全く某天狗まつたにあらず。先年吉田の家に仕つかへし。いがの平次成澄なりずみといつし者。しさい有て身退みしりぞき。今の名は降寂院。ふじの行場ばにおいて。梅若殿の御敵山田ノ三郎。一旦我手わざとにかけたれ共。ごんげんの利生によつて再ふたたび蘇よみがへりし事。

同行共わざとにき、態わざと此所こゝにたよらず。岩間寺にさんろうし。とろくまと真眠内まとうむ。三郎地ウが霊れい(六十六オ)魂来こんつて此家やの様子。くはしく語ハルルと思しひしが時色の間に。夢共ウしらず現共うつつ覚はず敵はんの大勢。松若丸を召捕とりかへる。途中とちうへほつかけはいかへしこく色を翔かつて。思ハルはずしらず爰こゝにおり立たし。飛行じさいは三郎ウがこんぱく。我ウひにくに分入わけいつてなすわざと覚ウツたり。

それ共調しらす右大将を始メあまたのけらい。山ぶし姿の我なれば。あれく松若うさびを奪取うばひたは。天狗じやくといひしこそ幸イ。敵よりのせんぎは是迄地ハル。急地ハルて此こばを退のれよとき、妙ウ々なる物語り。今の世迄も松若丸。天狗にとられ給たまひしと言いつたへは是コ也フけり。

源五地ウいさんでしからば貴僧おしへの教おしへに任せ。御供申ごくしんて立たのかんと。斑女諸共あまじ主の老母に暇乞ひまご。又またゑんあらばくと。互互いに名残なごりを惜おつてふ。今の別に物ものいはぬ。おくまがしがいに降寂院。甲とらふ法のりの出おぶね。矢橋やばせに近つき山田の里。人商人ひとなるとの古事ふることはよキ、に名高なきふじ禅定。人を導みちびく方便力教へんぱんりきうの道。とや成なぬらん(六十六ウ)

第四

燈下^{とうが}に數行^{かずかう}の涙^{なみだ}をうかへ独寝^{ひとりね}て見る夢にさへ恋しき殿御^{とのご}の面影^{おもかげ}は。残らでつらき桔梗^{ききやう}の前^{まへ}。忠義も深き蒔町^{まきまち}が介抱^{かいほう}にて。こぞより爰^{こゝ}に下女^{げによう}奉公^{ほうこう}おしげ小よしと変名^{かへな}して。憂^{うれ}を三島^{さんじま}の本陣宿^{ほんぢんやど}。泊^{とまり}とだへぬ其中^{うち}に。

名^なも高階^{たかしな}ノ右大将^{みぎだいしやう}親平公^{おんへいこう}の御寄宿^{おんきよじゆう}とて。表座敷^{うわざしき}にまんまく打せ。袴^{はかま}はなさぬ亭主^{ていしゆ}の弥六^{やむつ}。かつて口^{くち}より立出^{たてで}。ヤイ女子^こ共。

此^{こゝ} 鬧^{いそがひ}に何もかもうつちやつてもふ爰^{こゝ}でのらかはくか。ヲ、旦那^{だんな}さんのあの顔^{かほ}はい。此中^{こゝちゆう}の間のしよくだいが餘^{あま}りくらさ

にノウおしげ殿^{との}。サアらうそくのしん切^{きり}にたつた今^{いま}きた物を仰山^{げうさん}そふに。いふたが何^{なに}ンじや。惣^{そう}たいわいらは此^{こゝ}おやかたをへ

こにして。聞^きぬなく。あのおくにござる右大将^{みぎだいしやう}様^{さま}。此度^{こゝろ}（六十七オ）鎮守府^{ちんしゆふ}の將軍^{しやうぐん}になつて奥州^{おくしゆう}へお下り。お宿^{しゆく}申^{まを}スこそ

幸^{さい}イ。小よしがおねまの伽^がをすれは。此^{こゝ}弥六^{やむつ}浮^う上^{かみ}。三島^{さんじま}女郎^{ぢやうらう}衆^{しゆう}と名代^{なだい}の此^{こゝ}宿^{しゆく}で勤^{しん}メせぬかはりきめ細^{こま}にこきつかふぞ。

かくごしおれとつぶやく内^{うち}ころくくとかけてるおつち。申^{まを}旦那^{だんな}さん。下駄^{げだ}屋^やの武介^{ぶけい}といふ人が。此文^{こゝ}もつて見^みへました

とさし出^だせば封^{ふう}おし切^{きり}て。是^{こゝ}は右大将^{みぎだいしやう}様の御出頭^{おんしゅつとう}。厚見^{あつみ}ノ藏人^{くらんと}様^{さま}がお下宿^{げしゆく}からくださつた一通^{いつう}。其^{こゝ}お客^{きやく}早^{はや}ふ是^{こゝ}へとおつ

ちを勝手^{かつて}へおいやれば。

すれちがふてくるけたや武介^{ぶけい}。麻^あのづきんに。袖^{そで}なしはおり荷箱^{にばこ}おろして小腰^{こし}をかぐめ。私^{わたし}はお江戸^{えど}照降^{てりか}町の者^{もの}。厚見^{あつみ}藏^{くらん}

人様^{ひとさま}のお取次^{とりつぎ}キをもつて。右大将^{みぎだいしやう}様^{さま}へお目見^{めみ}へをいたす筈^{はず}。ヨット其^{その}義^ぎは御状^{ごじやう}に有^あ。いざ先^まあれへと。いふに武介^{ぶけい}が荷箱^{にばこ}おし

明^あケふろしき包^{づかみ}大小^{おほい}取出^でし。ていしゆ弥^や六^{むつ}に打^{うち}つれ（六十七ウ）かつてへ入^いにけり。

跡見^{あとみ}送^{しゆう}ツて。申^{まを}桔梗^{ききやう}の前^{まへ}。今^{いま}の下駄^{げだ}やは連合^{れんごう}イ又^{また}右衛門^{えもん}の近所^{きんじよ}の者^{もの}。後^{のち}にそつと様子^{ようす}を尋^{たず}ね事^{こと}によつたら。お前^{まへ}を娘花子^{むすめはなこ}

にしてお供申て帰ります。此うき手業も今しばしと。カラを付れは、そなた親子の忠義ふかき志。いつのよにかは忘ふぞと涙にくれての給へは。

アもつたいないそりや何おつしやる。参議忠通様の御息女共有ふおかたが。宿屋の下女に御身をやつし。うきかんなんの其中から。御行衛しれぬ少将様を慕せ給ふ御いとほしさよと。なげ、ば俱に打しほれ。人めなき間は主従が悲しさ計也。朝に春の季を悦び。夕に秋の気を愁ふ皆夢の世の境界と。悟切たる柳葉居士。行くらしたる旅の僧一夜のやどりと立寄給へは。互イに見合す顔と顔。ヤア父上かいの桔梗の前か。是はくとかげよつて詞に先だつ涙の際。

イヤそれなる女は何人ぞ。ア、いやお心おかる、者なら(六十八才)ず。私は吉田のお家の御ふだい。伊賀ノ平次が娘濞町と申者。ム、娘桔梗の前は其方か介抱にて。此家に忍といるよな。扱此度右大将ちんじゆふの將軍に任せられ。奥州へ趣といへ共。某日比こんいなる公卿を頼ミ。かれが悪事をそうもんせしに。とかく少将の行衛を尋よとの内旨。廻りあはゞ都へ伴ひ。罪なき趣きを申ひらかせん。心弱思はれそと。諫給ふ折こそ有し。

右大将親平近習小姓に手燭を持せ。しづくと立出。ヤア珍しや入道殿。此度勅命を蒙給ひ。歌枕の名所旧跡一覽有ル事御くらう千万。某も勅命によつて奥州へ下る所出合しは幸イ。夜と共に名所古跡御咄も承らん。ホ、安い事ながらいつになきこよいのくたびれ。しばしが間休足せんと立給へは。それくと右大将のさしづに濞町桔梗の前。ぜんごに心おくふかく父を伴ひ入給ふ。

折ふし向の下宿より急ぎ(六十八ウ)来るは厚見ノ藏人。是へくと右大将ひざもと近く打打ち。只今我おち参議忠通入

道招ずして是へ来りしゆへ。何事なきていに見せ一ト間へ通しおいたが。人の噂にたがはす。勅命にかこ付少将が行衛を尋ると見へたれば。某が後日の仇。人知らず打殺すてだてはないか。ホ、それに付くつきやうの事こそ候。こそこの春君の御かんきを蒙し高ノ武者之介。今江戸の照降町にげたやと成り。此度のおうしう下りを聞付。御かんきの佗致んと某を頼み此家へ参る。彼しに言付殺させては。イヤく日頃に道だてかんけんする武者之介。得心せねば却て妨。イヤ密に忠通卿を討てかれに科をぬり付る仕様は様々。万事宜相計ひ申べしと呼次は。お次の間より。高ノ武者之介義隆。町人姿引かへて袴かたぎぬ大小も。りつばきらめく髪ゆいめに櫛簪。さしもゆ、しき器量こつがら。御前間近く謹で。こそこの春不破の関所を。女に破られたる(六十九才)おちどにより御かん気の某。其時女めがにげさま手に残たる櫛簪。御らんのごとく頭にさすも君の命を守て。一日片時忘しざる心の戒。せんぎのすじは其夜の相図。歌を吟せし声をしるべに浪々の内も世上の女の五音に氣を付ケ尋れ共。今日の只今迄出合す。此上は御るくはうをもつて。億兆きせんの女の五いんを承らば。やはか知しざる事候まじと恐入て言上す。親平はくくうち點き。其非を忍とざる時ば其功全しといへり。是迄女がせんぎ尺寸の間も怠ざる事神妙く。先々此家の女共残らず呼出し。五いん四せいをよつく聞ケよと。仰の内より小よしどのおしげおつちと呼つれく立出る。柳葉こじも娘の身の上きづかはしと。おくより出て座に付給へは。厚見ノ藏人お側小姓に燭だいいしめさせ。コレく武者之介。関所を女が破し時くらがりなれば。今も同じくくらがりしてとくと五いんを聞れよと。御(六十九ウ)前の手燭を庭になおし。掾先の手水鉢を火袋となし打きすれば。とこやみの夜とあやもなき一間に各居ながれたり。

武者之介座を立て真中におし直り。ヤア〜三人の女共。今よむ歌をよつくまけ。ふはの関朝こへ行は霞たつ。野上のかたに鶯ぞなく。サア此通り一人づゝ何成共ふしを付てうたふて見よと。いへはおづくみだい所。不破の関。ア、こりやくく小よしとやら何もこはい事はない。ふるはず共とくとうたへさ。アイ。あいとはいへど猶こはく。不破の関。朝こへ行は霞たつ。野上のかたに鶯ぞなく。ム、いや汝ガ五いん違たく。関破の女でないといふ間にそつと蔵人が。鏝もとくつろげ拔足して柳葉居士を只一討と。かけよる所を武者之介心得て火袋とれば。くはつと厚見がつらまばゆく。手持ぶさたに（七十オ）もぢ〜と下緒捻て引さがる。

コレサ、蔵人殿。見れば刀の反打チ、へ出て何めさる。イヤ是は。サア是とは。サ、去とては面目ないが。はつたりと暗成つたて百物語を思ひ出し。怪ものが出やうかとかふ反打たは臆病風ぶつ共さたなし頼むく。ヲ、あの嘘はいの。此しげが透して見たが。どうでもあの御出家様を。ヤア女其様なばか尽さず共早く歌を唱へく。サア武者之介火袋かけられよと。いふに気の付く右大将。コリヤ〜蔵人。くらく成てそさうのないやうナ。合点かと示合する主従が。巧をそれと知ながら動ず去ぬ柳葉こじ。側からはあく桔梗の前油断やるせもおしげか気配。

サア〜是から私が番。イヤ〜其方はもふよしにせい。言五音を聞くに。関破の女のこはねとは年頃が大にちがつた。それ〜次の女今の歌を覚えているか。いる共く。ハア何とやら。ハテ物覚のわるいやつ。ふはの関朝こへ行は霞たつ。（七十ウ）ヨットそれよ。ふは〜で。朝食くへは。ゆげがたつ。ヤア置おらふ。似てもにつかぬびしやがれ声飛すさつてけつかれと。叱るすきまもうか〜ふ蔵人。すらりとぬいたる白刃の光りとつこいさせぬと武者之介腕先拵で動せず。何やつなれば。

んざし。さして行衛を見送りく右大将。蔵人引つれおくに入ル。

桔梗の前はがんぜんにかなしさにくさ父の仇。のがさじものと懐剣ぬいて(七十二才)かけ込み給ふを濳町おしとめ。右大将は勅命を蒙ておうしうくだりの折からなれば。手むかいするは都への憚有。差当て敵といふは武者之介私に御任せと。懐剣もぎ取表の方へかけ出ヌをヤレまで兩人早まるなど。朱に染みて柳葉居士むつくと起させ給ふにぞ。二人は恟かけよつて。ヤア是濳町。父上にお怪我はない。ホシニなあ。それに又此血は。ア、騒まいく。武者之介が我を一ト刀刺と思ひの外。かれが腕をついて刀を血にそめ。右大将を欺し志をかんじ。し、たる体にもてなしたはコレ。是を汝に渡さん為と懐中より。一箇の箱を取出し桔梗の前に給ければ。

濳町諸共ふたを取々おしひらき。エ調、イ是は敵右大将を追討の御りんし。ヤア音ト高し。父は是より都へ帰る。少将の行衛を尋て早く渡せ。ハ、はつと計にいたゞきく。物数いはで互イの心におさむるりんし。箱根にちかき三島の里別れて。こそは三

重(七十二ウ)

道行京花形

花の桜木世にちりはめて。代々の帝の。其言種を人に教の年代記。二人りつれたる読売の。京の花がたの染ゆかた。しば編笠を。桔梗の前。人目の関や濳町が深き。情に。忍ぶ身は。只一とせを。一睡の夢と三島の里にさへ。隠れへかねたる。主従の姿。心も一やうに。男めかする。こはづくろい。往来の人に立むかひ。サアく召ませく。是は日本年代記のかな書。お女中様お子様がた迄も。読よいのが御重宝。抑日本の始り。天地いまだ開けざる其中に。現れ給ふを。国常立の

尊と。申奉り。我朝人の。始り也。扱。人王に至つては。神武すいせい安寧いとく。孝昭孝安。(七十三オ) 孝靈天王の御宇にあたつて。近江の国に。一夜に湖涌出。其土は則。駿河の国のあふ士山手に取。やうに見へますと。人の氣をとる商ひ口。孝元かいくは崇神の帝十一代。すいにん天王の御時。野見の宿禰。当麻の蹶速といふ者。力を角しより。相撲といふ事。始つたり。十。二代のあまつひつき。景行天王の御子。日本武の尊と申は御身のたけ一丈。十六さいの御年。あづまぢちて武蔵野や。我ぞこもれる若草に敵の大勢火を放つ。時に尊の御腰のたちまち。ひとり抜出て。もへくる炎かるかやの。草薙の宝剣のるせひはげしき成務ちうあひ扱。十五代は女帝。神功皇后神かぜや。天照大神宮の告によつて。新羅百濟かうらい国迄切なびけ。帰る波かぜやすくと。(七十三ウ) 正八。まんを産給ふ。是。応神の帝とかや。仁徳りちう。反正おんげう。安康ゆうりやく。此御時に。浦島太郎といひし者。龍宮城におもむくなり。清寧。けんそう仁賢の。めでたき御代に引かへて。廿六代武烈天王。御悪逆の其中に。孕女の胎をさき。梢に人を追上し。殺し給ひし悪王の在位はわづか八年にて継体。あんかん宣化きんめい此御代に。始て日本に。仏の教へひろまる也。三十一代敏達帝の御弟。用明天王と申は。玉世の姫を恋佐。草刈さんろに玉体を。やつし給ひし。例も有ル。我も恋ゆへ様々に。世のうき事に。大磯や磯によせくる。波にさへ。女夫くは有ル物を。夫にはいつか相の宿ふりかへり見る梅沢の。名もなつかしき梅若が。さきだつ日教たちぬれど。忘る、ひまなき子故の(七十四オ) やみ。あ、ら恋ししの梅若や。よや梅若と呼こがれ涙そゞるにとつかはと。急ほどがや打過。で神奈川の。町程近しと。又編笠に。顔かくし。三十六代皇極天王のおん時。信濃の国の住人。本田小太郎善光は津の国難波堀江より。上り給ひし御仏を。我本国に安置して。善光寺を建立有り。

今の世迄も難波津にあみたが。池の常燈の。光りたへせぬ御誓。今年は都で御開帳もござんすげな。則是迄よみましたか上の巻。是から末は。下の巻に委しうしるし。封本にして上下が六文。一さつが三文サアくめせと。売手の品ナに買人の。心もいさむ春の道。つるみ川崎六郷の渡しをこへて品川や日影は。まだき高輪の町にぞたどりへ三重着給ふ(七十四ウ)東路に名高き江戸の町の数。八百八町の其中に下駄と雪踏の世渡りに。照降町の。両側は軒を並し見世行燈。頃日世上にいひふらす豊蔵いなるの靈験とて。夜ルもとだへぬ人くんじゆ。老若男女袖をつらねて行かよふ。

向角のげたやの武介。仕事おしやり門に出。コレせつたやの嫁女お米女郎。おやぢ殿のるすの間なつとの、じをやつたがよいはいの。前垂がけのこしふなく。雪踏の表に艶かける押棒の手を放れる間はない。もふそろく店仕廻んせ。ハア俄に空が。曇てきたといふ事かへと。気毒そふにせきだやの。嫁はうろく下駄屋が悦び。てんとたまらぬ天のあたへ。雨さへふれはかいなでに雪踏店は皆。あがつたりやといふ間も嵐にばらく。降くる雨に下向の男女。げたやが軒にさしかり。(七十五オ)指下駄挽けた二つばかり馬。思ひくに買求め。皆く家路に立かへる。

むさしの、草のゆかりの。江戸紫。ふくめん取たるほうろく頭巾に袴はおりの着こなし迄。風流りつぱの若侍イ。雨のはれまを軒つたひ。げたやが店に立よるを。申くお侍イ様。お召なされてござんすはお草履そふな。こんなざぶりのあげくには湿のあがらぬが雪踏の一徳。おかいなされて下さんせ。イヤは々お米女郎。得手勝手な事いはしやんな。雪踏でははねがあがる。こんな時にずんどよいのが草履下駄。お求なされとす、むれは。イヤ是く兩人。所の名さへ照降町。商売論は有うち去ながら。げたもせつたも所望になし。暫く是にて待合す人有レは店先をかりたし。お安い事。さあく是へ

と。武介が店へ伴ふてお茶よ（七十五ウ）たばこと饗応所へ。

深編笠の二人連し。お米を見るより。コレく女中。今是へ京家のお侍イが。待ッ人有てお出の筈と。いふ声聞てヤアおまへは。こちの豆蔵殿のお袋様じやないか。のふお久しやと取つけば。笠を取て濛町が。驚キは尤。連合又右衛門殿はまめなか。アイお前もおまめで目出たい。あなたがつれまして戻らしやんした花子様かいな。待合せて居さしやんすお侍イ様は。向イの店にと。聞に嬉しく桔梗の前も濛町も。かけ行門口武介と見合す顔と顔。ヤアこなた衆は三島の宿の。エ、イ。こなさんは武者之介殿じやないかいな。ア、是々むしやとした事いふまいぞ。さつきにから聞いていれば。又右殿の内義や娘御そふなに。せんどはよふ隠さんした。それいな。わしが此娘の花子をみの、国へ（七十六オ）迎に行。長くゝのるすの間に。隣へ宿替してごんした。下駄屋殿共しらず。知ラしやれぬは無理でない。扱こなた衆を待合せてござるあのお侍。さつきにから小間言いはず思はせぶりはどうでも花子のふかまじやの。イヤ全く左様の者ではない。最前豊蔵いなりであの両人が年代記の読売。一冊求めてみやげにせんとそれゆへに待合せた。ハアテ此げたやは酔でござんす。お隠しなされな今夜は久しぶり。雪踏屋の親仁殿と女夫合イの咄もある。其中で花子とおまへがねられもせまい。こちの内をかしますお侍様つれまして花子殿。のれんの内へとむりに押やり。寡なれ共嗜んで枕は二ツ押入に。ふとんも有と気を付れば。濛町悦び。ホンニ日外三島の宿クにての心づかひといひ。武介（七十六ウ）さんのいかいお世話。今のお侍イ様は野上の廓で花子のなじみ。ふしぎに廻り合た其上に。お前の様な結の神に出合たが娘が仕合。サアあの衆を世話やくも。有やうはるすがしてもらいたい。コレお米女郎。おれは吉原橋迄叶はぬ用でいきます。ヨ、そんならかみ様はまあ内へと。伴ひ帰て。見世戸棚より雪踏取

出し。ノウ武介さん。ついでに夜番の与五八の誂。此せきだを。ヲ、届けてしんぜふ。其代りにはこちの店のるすを頼ムと。雪踏たづさへ吉原へ橋へと急行。

外より戻る又右衛門。つかく〜と内に入ば。ノウおやぢ殿お久しや。先お達者でといはせも立す。ヤア女房共。たつた今吉原橋で。下駄屋武介に様子は聞た。娘花子が廓のなじみ。隣に寝ている侍イが名。お身は知ツ（七十七オ）ているかそれき、たい。ハア久〜で内へ戻つたわしが身の上。娘が事は打やつてかはつた間事。ム、しらぬといふ前置か。もふぬかすなとはひでも大事ない。扱身が古主高階の右大将親平公。おうしうへ御下向とて。当所入間の宿々に御逗留。お尋もの、おふれも有れば。そち達にいひ聞す事が有。爰ははし近こつちへ来れと妻とよめ。伴ひおおくに入にける。

折から帰るむすこの豆蔵。古郷へはれの錦の袂引かへて。羚羊の裘きつ、馴にしこつがらは。其たけ一尺三寸。手びらほど有レ小編笠腰にさいたる大小迄。ちつくりくり〜いが流の。竊の術ぞふしぎなる。

我家の戸口に立寄て。ほと〜と打叩ば。誰レじやく〜。とおくより夫婦嫁のお米走り出。となたでござんす。ホ、そふいふのは女房よねじやないか。（七十七ウ）ヤアこちの人の声ではないか。豆蔵殿の戻らしやつたと。門の戸ひらいて。申かみさん。たつた今迄声でしたが。豆蔵殿は見へませぬ。ハレやれ龜相な爰にいと。編笠取てしつ〜と。打通れば。

きやつといふてお米は飛のき。ためつすがめつとつくと見て。なんぼちつそふならしやつても。夫ト豆蔵殿の顔にまがいも。あらなつかしやとすがり付くをはつしと蹴のけ。きよろつくくな女房。此様に形チのちいさく成た其子細。親者人に物語るを。飛しさつて聞キおろと。刀をぬいて手をつかへ。去々年の冬より武者修行に出。東八ヶ国を経廻りし所に。母方のちい。

伊賀ノ平次成澄殿に廻り合あひ。我が流いの細ほの術じゆつを授まけり。御覽ごのごとく身に着きたる竊しかの装束しやうそく。色う赤あかけれ共もまさかの時は人ひとの目めに（七十八オ）た、ず。秘密ひみつをもつて是こゝを着ちやくすれば。大おほの男おとこの此こゝ豆蔵まめくら。ちいさくほそるが細ほの妙術めうじゆつ。其上そのかみに能主人よきを求め。年来ねんらいの望のぞの通り侍さむらいに成なつて罷帰かへり候まう。おやち様さま。母人はは。お悦よろこびなされて下くだされと。言こと計かりは有ありにはかはらぬ乙声おつにて。ませくしたる顔かほも姿すがたも。小猿こざるの居すりしごとくにて。礼義れいぎたゞしく聞き々々たり。

父母ちちとかふの諾いへなければお米こめがひつくり。ホシニ親御達おやごのあつけに入いりしやんすもむりじやない。伊賀衆いげしゆ甲賀衆かかしゆとて。日本にっぽんに類たぐひのない竊しかの家筋けしん。こんな術じゆつが有あると常つねがねお袋ふくろさんの。咄はなには聞きいたれど。豆蔵殿まめくらが餘あまり幼氣こゝろにならしやつたによつて。女房にようぼうの身みでは。あられない事こと迄までが思おもはれ氣きづかひな。此儘このままでひとつに寝ねて。口舌くちぜつなどした事ことなら。夜着よぎの袖そで（七十八ウ）からすつぽりぬけて。尋たずねさせて下くださんな。是こゝ。かふならんだ所ところは。悉しつぱい皆みな蚤のみの女夫めおとこじや迄まで。ホ、くくと笑わらいける。

父ちちはじろく打うながめ。ヤア嫁よめ。それに有あると誰たれが刀やいばじやエ。ほんに此こゝ刀やいばは。たしかに豆蔵殿まめくらの拔ひて下くだにおかしやる迄まではちいそふ見みへたが。目めふる間に常つねの通り通りの刀やいばの長ながみに成なたは。寄妙きめうなこつちやといふに豆蔵まめくら。ヲ、それがいが流しゆひの妙術めうじゆつ。我主人わがしゆじんは今御漂泊いまひうはくの御身ごみ。今日けふ当所とうじよ。豊蔵とよくら稻荷いなりへ御さんけい。御迎ごむかひいに参まゐりしついで。親者人おやぢの御ごさげん窺うかがひに立寄たて候まうと。語かたる内うちより母ははは手てを打うて。ホシニふしぎや最前さいぜんわしがいなりに参まゐて。お目めにか、つたお侍さむらい様さま。ちつくりけな男おとこが迎むかひくる筈はずじやとおつしやつたが。扱あはそなたの御主人ごしゆじんか。本社ほんしやに籠こもてゝ有あれば。お迎むかひは延引のびひしても大事だいじ有あるまい。（七十九オ）久ひさしぶりしやお米こめ。きてんをさかしやいの。ア、い。わたしら女夫計めおとこりじやない。親仁おやにんさんとお袋ふくろさん共とも久ひさしぶり。べらつて爰こゝにいるは不遠慮ふえんりよサア。こちの人ひとおくへいかふと刀やいばをもつて立上たれば。

きよろく／＼あたりを見廻して。久／＼て内へ戻つたれば勝手を忘れた。ちいさふなれば身もかるい。女房共だいていきやと夫婦打つれおくにいろ。

又右衛門つゝ立胸ぐら取てヤイ女め。駈に見かへ夫トを皮にする不所存もの。サア。豆蔵が主の名をぬかせ／＼とどうど打付。ふみのめさんと足を上てうんとこけ。又立か、つてかつぱとふし。起上つて。あらふしぎや。どうでも儂名作な懐剣か。

但しはあらたな守りを持しに疑いなしと。飛か、つて懐へ。つゝこむ夫トが腕先キに濙町すがつてア、是々。ヤア何ンと是でも（七十九ウ）あらがふかと一ツの箱を引出せは。イヤそれを見せては一大事と。あせる女房をしつかとふみ付ケ。箱の内なる一通を押ひらき。読も終らずこりやこそ見たか。古主右大将殿を追討の御りんし。此。又右衛門が手に入しは。主君の仕合我身の出世と。箱に納てエ、につくき女めと。繪旨の箱にてはつし／＼た、く後へかけ出る豆蔵。どつこいさせぬ親父殿と。御箱もぎ取おくへにぐれは又右衛門。夫婦もつゝいて入にける。

下駄屋の内には少将みだい。何事やらんと燈火吹消ひそみて。様子をうかゞひ給へは。おくより出る又右衛門。りんしの御箱をいたゞき／＼一走に。いづく共なく走行。

跡より女房が追かくるを何事ぞいの濙町と。とゞめ給へは。ヤア御台様か。大事の／＼御りんしを。夫ト又右衛門に盗れまし（八十才）たと。いふに少将御夫婦も忙て詞なき所へ。豆蔵お米走り出。今親父がうばひし箱はからつぽ。御りんしは拙者めが。ちよいとかくして是爰にと。少将殿に奉れば。ホ、豆蔵よくしたりな。先刻より桔梗の前に聞ケは。舅忠通入道殿の吹拳をもつて給はつたる此りんし。再び奪かへす事。本懐をとぐべき瑞想ぞと。謹で頂載有しげ。

豆蔵重て。君是へ御出有し跡にて。浅草寺へ松井ノ源五が尋来り。当国隅田村に蟄居し。松若丸様を守立。拙者が祖父降寂院諸共。旧恩の士をかたらひ。敵右大将親平を夜討にせん企。急ぎ彼ノ地へ君を御供仕れと。源五がさしづ吉原橋のあたりに。御迎イの舟をつなぎ置候。父又右衛門が見咎ては事やかまし。道をかへて舟場へ御供仕らん(八十ウ)と。申上れは少将 殆悦喜有。ヲ、等閑ならぬ松井が忠節。降寂院とはいがの平次が事よな。某はすぐさま隅田村へ舟路を急ん。桔梗の前は豆蔵夫婦を召つれ。浅草寺のゆかりのかたに恐れよ。我供は濠町計いざ脇道の案内せよと。舟場をさして急る、。別かなしき桔梗の前。コレのふしばし我君と。かけ出給ふを夫婦がいさめとゞむる折から。吉原橋の火の番与五八。右大将が内意を受。附人引つれ雪踏屋の。戸口に立ッてうかゞふ共。内にはしらず。桔梗の前は涙にくれ。是に付ても思ひ出すは花子の事。自にかはつていくせのなんぎ。自は又花子になつて世を忍べは。御台様くくと大切にしてみたもらいでも大事な。豆蔵は我君の跡をしたふて御供(八十一オ)申しや。ハアいかにも我君の御供。母濠町計では氣遣に存ます。そんなら御台様は此米が。浅草寺へ連レまして立退ませふと。豆蔵夫婦。御落支度取急ぐ。外には与五八ひそく声。コレく旁。今聞れし通りを。武者之介殿へ申上て下されい。ヲ吞込だ。武者之介が見へる迄必にがすな合点じやと。手筈をきはめて二人の足軽。今きし道へ引かへせば。跡には与五八。門の戸こご明つ、と入。ヤア豆蔵。わりや何ンとしてちいさく成た。ホ、おれが骸のせんさくより。むたいにふん込うぬは曲者。ヲ、右大将様より御内意うけ。桔梗の前をせんぎにきたと。御台を目がけ受よれば。どつこいくと豆蔵が。足先キ取て打のめしつかとふみ付ケ。ヤイ与五八。(八十一ウ)からだはちいさぶ成たれと力ラはむかしにかはらぬ豆蔵。儂レをばらをの雪踏屋が手なみを見せんと。ぐつとさし上溝石に打付れは。頭みち

んに石割せつた。あへなきさいごぞ心地よし。

かゝる所へ高ノ武者之介義隆。むかしにかへる侍姿。はな／＼しく頭にさしぐしかんざしは。君命忘ぬ勇者の励み。道をふさいで大おん上。ヤア／＼豆蔵。右大将殿の御本陣入間の宿にて桔梗の前の討手をかふむり。武者之介が向たり。ホ、／＼こりや面白。右大将にもらつてきたか。かさ高な大小いふく。武士に成ても今迄の商売がら。下駄を預けたほざき事。みだいの在家はしらぬはい。とつと、かへれと豆蔵が。にらむ目もとは山椒粒。小粒で辛き男也。イヤちんじても（八十二才）のがれぬ所。いが流の竊の術をたんれんしたる儕。桔梗の前をかくまはぬとはくらく。それなる女が御台所に極た。ひつとらへて面縛させんと。飛でかゝるをかいくゞり。小股を取てこりやく／＼。からだはちいさし一握と片手にひつさげふり廻し。もみ合はづみいかゞはしけん豆蔵が。上帯ほどけて竊の装束。ぬげれば忽チ六尺ゆたか見かはす人相。肌には小具足こて脚当すつくと立たる其有様。今迄ちいさく見へたるは羚羊の裘竊の術ぞ奇妙なる。

女房お米かけよつて家の宝と竊の装束。かたに打かけ御台を伴ひ落て行。

コリヤまで女とかけ出すを引すりもどせばおん放し。さそくをふんでかゝれは身をかはし。くんづ（八十二ウ）転づ引すへ捻ふせ。いづれ劣ぬ武士のさしくし。弁ぬけめなく。又かけ出せは豆蔵が跡をしたふて三重へ行空の。

照降町より吉原へかゝれは其名よしはら橋。夜の往來の非常をいましむ。橋の半の番所。切ぬきの窓とやいはん角行燈。光も細くいとしん／＼と更る夜に。いたはしや桔梗の前。照降町をのがれ出。豆蔵がつまのお米を力にて。浅草寺へと急る。

逢跡はかより女ウの非人ひじん。三味線ウ首すげ笠手さげにもつてかけ来り。卒爾そつじながらおまへは。吉田の少将様のみだいの所。桔梗の前様じやござんせぬかと。とはれてはつとお米こめが恠びつり。見れはこなたは。此頃こちの近所を。アイ三味線ウひいて袖そで乞ごする女子おなごでござんす。そつちに見覚みさんしたりや。こつちにも見知みつてゐる。おまへは雪踏屋ゆきふみの豆蔵殿まめぞうの。お内おん(八十三才)義よさんで有あぶがな。わたしはみの、くに。野上ののけいせい花子はなこじやはいな。ノウ久ひしやと桔梗ききやうの前まへ。すがり給たまへはお米こめも俱ともに。互あの身の上みづかひうさつらさ。語かたりもあへず歎なげくにぞ。

花子はなこ涙なみだのひまよりも。敵かた右大将みぎだいらうのもとへ御台様ごたいやうの代しろりに行いしを。松井源五殿まついげんごの情なさけにて漸やうやくのがれ出でたれ共ども。父ちち又また右衛門殿ゑもんはもと右大将みぎだいらうの家来筋けらいすぢ。それ故ゆゑに内うちへもたよらず。三味線ウひいて諸人しよじんの情なさけに命いのちをつなぎ。こんな浅あましい姿すがたに成なたれば。さつきに少将様せうしやうやうを運つれまして。母様ははやうが此所こゝへお出でなさんしたれど。はづかしさに見ぬ顔かほしていやんした。う、いかに我夫わづまは濳町かづちやう一人御供ひとりごきにて。此辺こゝへお出での筈はず。早はやふあいたい合あせてたもと。託かた給たまふをお米こめがせいして。少将様せうしやうやうにお逢あはなされたいは尤ななれ共ども。敵かたの(八十三才)けらい武者之介むしゃのすけが見み咎とがて今宵こんやの騒動さわどう。しるべ有あれば浅草寺あさくさじへ供ともせよと。夫うト豆蔵殿まめぞうのさしづ。何なにのかのと隙ひまどつて跡あとから武者之介むしゃのすけが。追おかけ来きらば何なにとせふと思おもし召めす。花子様はなこやうもサア一所いよにござんせ。イエ。そふ聞きからはわたしは爰こゝに用もちも有あり。ちやつと御台様ごたいやうつれましていかしやんせと。心こゝろをあせれば桔梗ききやうの前まへ。涙なみだと共に暇いとま乞ご。お米諸共こめしよどもせんかたも。泣な々な別わかれ浅草あさくさの御寺ごじをさしておち給たまふ。

橋はしの下したなる苦舟くるふねには。母ははの濳町吉田かづちやうノ少将せうしやう。しづうを聞きてヤアやく花子はなこ。豆蔵まめぞうを待まち合あせて。某たが此舟こゝに有あ共どもしらず。浅あましき姿すがたと成なたれば。見ぬ顔かほしたるとは。不便ふびんのもの、心こゝろやと涙なみだに。くれての給たまへは。

花子地中も恋しさやるかたなく。殿ハルさんと物ウいふたらニタ親を。奈落なうくへ沈しづめふと斑女（八十四才）さんに。誓文せいもんを立た色によつて。廻調り合ても。詞地ハルをかはす事さへならぬ。心上の内のかなしさを。推量すいりやうしてたべか、様シと。橋ウのらんかに身を打かけ。こぼす涙地中は苦舟ウツシに雨を。ふらせるごとく也。

詞調イやく其誓文を立いでも。そなたを誠の御台様と心へ。右大将より絵姿をもつて。詮義せんぎさびしき身の上。殿様と一所に片時もおく事ならぬ。君地中もあきらめ忍せ給へと苦引覆中おほへは。遙はるかに聞ゆる人音に花子ハル驚色き。ア調れくか、様武者之介が御台様の討手にくるに極た。殿様を見付られて下さんすなど。其身もかしこの橋はしづめ詰ウツマリに忍ぶもへくらさ星の影。

か、やきうつる瑠璃たまぎの櫛くしに。銀下の笄かんざしさいて高鉢色巻。こて脚当ハルに身をかため韋駄天いだてんのごとくかけ来るは。高ウ武者之（八十四ウ）介義隆よしたか。はしの半なかばへ渡りか、つて。ヤア豆蔵調めが某を見失うしなふて隙あひらとるか。此橋限はしづめに先ハルキへはやらじと欄干らんかんに。諸手ウをかけてゑい。やつとこち放し。すじかいにやり渡せば。透すつをあらせず豆蔵調が。おつかけて来て色コリヤどうじや。おとなげない武者之介。子供遊あそびのはつとをしたな。ヲ、此橋限はしづめに。仮かりに関せきをすへたれば。脚すねふん込こんで。みだいの首くびうつ妨さまたげひろぐと。目に物見せるぞ。ハ、くくしやうこりもない。関せきよば、り。ふはの関せきでふかくを取り。右大将に勤当きんたううけ。其ごとくさしかざしたる。櫛くし笄かんざし諸共もろともに。うぬがそつ首くびさらへてこます。イヤ安外あんぐわいなる毛け二才にさいめと。こち放はなしたるらんかんを。ぐつとさし上うケ打てかゝる。どつこいさせぬと。しつかと受うとめ色こりやくくと。捻ねぢかへせば。さしもにかためし鉄物かねもの。（八十五才）びやうぎ。一度にゆるんでめりくく。どろくどつと橋板はしづめを。ふみとどろかすいどみ合あい。見るにたへかね花子ハルは三味線持さんみせんもちチながら。二人が中ちゆうへわつて入。諸方もろかたへ絵姿を廻まわし。せんぎ有あル桔梗ききやうの前まへは自みづか。是こゝへ名乗なをりて出るからは。武者之

介も豆蔵も。必せきやんな早まるまいといふに恠り。扱は母の噂に聞し。妹の花子成ルかと。思へどいはぬ兄の豆蔵。武者之介は懐中より絵図取出し。番所の火影にすかし見て。此絵の面体によく似たれば。扱は御台所の代りに立た。野上のけいせい花子じやな。しかも豆蔵が為には妹。ソ、それは何を證據に。イヤ先刻照降町にて。火の番与五八が訴人よつて聞いたくと。星をさ、れてはつと計り花子兄弟。舟に忍んで少将（八十五ウ）濊町。とやせん角やと氣をあせる。化の皮を踏されさぞほいなるらんが。今改めて武者之介が。主君を欺く身代りではなし。御せんぎの絵図にあふたる花子。御台所に成すまし。色から取入り意見を申上。右大将殿を善心になしておくりやれ。さすれば吉田のお家の為にも成ると。忠義一途に思ひ込ム。心は等閑なかりけり。スリヤ妹を御台所にして。受取て下さるか、是く。なんぼでも右大将殿に。従ふ事はわしやいやく。いやといへは命チがないが。何シとくと二人がす、むる後の番屋の内よりも。ヤアく娘。必右大将殿に従ふなど。戸を押ひらきぬつと出るは又右衛門。花子見るよりソツなつかしやと、様ンかいのと。すがり歎けど見向きもせず。ヤイ豆蔵。いかに身代りな（八十六オ）ればとて。妹に不義をす、め。桔梗の前の名を付けて。女の道を捨てさすれば。吉田の家の名折れと成。それでもうぬが忠義がたつか。武者之介も其通り。邪の恋慕より事発たる主君の悪心。御いけん申上る根性はなくて。花子を御台所にして。お髭のちり取ル不忠もの。加藤小豊治枯隆といふ。父の名迄を下しおるか。イヤ三十年いぜん御改易にあはれし。武者之介が父の名を。知たりし御辺は何者。ヲ、汝が親加藤小豊治とは此又右衛門が本名。エ、イトと人々驚けば。又右衛門一つの箱を取出し。先刻此御りんしを奪取り。是なる番家に忍居たればこそ。思はざる親子の名乗をする。此小豊治が若気の至り。先手右大将殿のお乳の人と（八十六ウ）忍び契りしに。武者之介

汝を身に持チ。不義の科露見し。我しは高階家を御ついほうに合しか共。其節右大将殿はやうく三才。余人の乳を召上られねば。母諸共に武者之介はお家に残しおかれ。某は他家の奉公迄おかまひにて。牢々の其内又候や。吉田の御ふだい伊賀ノ平次の娘。濞町に馴なじみ。連して都を立のき。照降町の雪踏屋と成つて。設しは豆蔵と此花子。縁はふしぎや。兄も妹も。少将殿に仕て忠義を励む折から。げたや武介こそ。高階家の浪人。本名武者之介とき、しより。扱は都に残し置たる。紛とは知りながら。今互いの御主人敵みかたと成り給へは。親子兄弟の名乗りもならぬ。照降町の下駄と雪踏の。商売迄が敵どし。せめて御りんしを武者之(八十七才)介に渡し。忠義を立させんと存の外。披見れば箱は明キから。かゝる巧も全く我悪心にあらず。兄息子に忠義を立させ。繪旨を盗まれたる女房や豆蔵が。身の申訳まつかう計ふ是見よと。諸肌ぬげば腹かき切て布にて巻たる必死の深手。娘は悲しく取付ば。あはてる豆蔵武者之介。舟には濞町気も狂乱。早まつた事して下さつたと。むせび歎けば少将も。涙やるせはなかりけり。

工、残念や親人共しらず。一年餘り同じ所に住ながら。不孝にくらしたる此武者之介に。忠義を立させんと父の御恩の有がたや。イヤく兄者人より不孝ものは此豆蔵。御りんしをはいかへしたる上は御切腹には及ぶまいもの。思ひ詰た事なされた。と。さしもに(八十七才)たけき者共が前後深くに見へければ。

ヤア兄も弟も未練な諄。右大将殿へも少将殿へもか、はらず。父が腹切り相果るは。そち達兄弟に。忠義を立させん。為なるぞや。

最前より様子を聞クに。不便なるは娘花子が身の上。八ツの年から都九条の廓へいて。美濃の野上迄売渡され。親の為に君

喋り。関を破りし女の五音に疑いなし。扱は花子汝で有たか。ア、いかにも関破りの科人は自ラ。比興みれんに隠しはせぬ。

サア兄さん（八十九才）首切て。お前の身の言訳にして下さんせと。みぢん臆せぬかくこのてい。

ホ、いさぎよき白状なれ共。望に任せ首打てさし上ては。関破りの女といふ證據がない。不便ながら繩かけ御前へひくと。

刀の下緒ひつしごげば。ハ、情なや右大将殿の。館を漸とぬけ出しに。又もや連レ行。二度のうきめを見せんより。今爰で殺して給はれ。兄のおじひと計にてかつはとあして泣きさげお。

いか成所存か父又右衛門にじりよつて花子が肩先きずつはと切しは。うんとものつけに反かへる。橋の上下四人が仰天。

騒まい。娘がせつなる心底をかんじ。此ごとく手を負せられたれば。絵姿に合たとて枕かはそふとはの給ふまじ。右大将殿の

御前へひかれ。我レこそ不破の関破りと。いさぎよく白状して。兄武者之介が誤を申ひらき。此手て（八十九ウ）すぐに

死るならば。御台所のせんぎも是迄。さはいへふびんや非人乞食に迄成り下り。身の果は親の手に。かゝる因果も有ル物か

と。いたはる其身もいた手のくつう。

母はたへかね声を上ケ。一ト度みだいな様の代りに立。敵のもとへとらはれし。其時のかなしさの余を今又泣カするかと。く

どき立れば。花子は漸くるしき息をつぎさほの。三味を力ラに立上り。初メて逢た二人りの兄さん。か、様シに別れるはか

なしけれど。と、様シと俱にめいどへいて。かうくつくそふと思へは嬉しい去ながら。いとしかはひと言いかはした。好

た殿御に引別れ。思はぬ方へ死に行ク。心の内を。思ひやつて下さんせと。歎はづみに三味線を。おとせば舟には母と少

将。今は形見と取上てせんご深に見へければ。

又右衛門よはる心を取なおし。コリヤ兄も弟もよつく聞ケ。父が名残に二首の歌を残しおく。思ひきや。下駄やせきだや（九十オ）子に持テば。照かし降よ親の心をと。詠も終ず巻たる腹おび切ほどき。刀おし当首。かき切たる此親父が。さいごもよしや吉原橋を今の世に。親父橋とて名に高き謂はかくとしられたり。

角てはあらしと豆蔵つゝ立。ヤアく母人。拙者は父のしがいを葬り。跡よりおつ付キ奉らんと。心を付れば武者之介。関破りの女が手にいる上からは。櫛簪も是限り。妹が形見母人へと。舟へ投入レ手おいを伴ひ立上る。

陸と舟との別路や。橋の上より豆蔵が。空しき父の。首を諸手にさし上て。見ずればわつと泣ク声に。夜明ケ鳥の声そへて。野寺のかねのひゞき迄哀レ数すそふ無常の道人間。ういの此世には悦び有。かなしみある。照降町の職敵キ。一首の歌に兄弟の子供を。恵む親父橋かゝる。例をむさしの、世の。諺に伝へける（九十ウ）

第五

釣の糸細して餌かうばしければ。よく魚を得るといへり。故は近江の漁夫成しが。今は吉田の家の忠臣松井ノ源五兼俊。主君少将殿の御在所相しれ。御迎イの為メ隅田川の。渡シ場ちかくす、みくる。

向より数多の行人引ぐして。先きに立ツたる山伏姿。ヤア貴僧は一本杉の降寂院。イヤ源五殿。兼て書通にて申合せしごとく。右大将が入間の旅宿へ今宵の夜討チ。ふじはぐろの行人をかたらひ貴殿のもとへ趣く所。コレハく今日はいかなる吉日。主君少将殿はへ御出の折から。旁の御加勢はふじごんげん。吉田一家を憐給ふと有がたし。ホ、少将殿へ降寂院が御目見へも。途中にては敵への聞へ有。すぐに隅田村の貴宅へ趣き。夜討のかけ引万事は後刻と手筈を極め。悦ヒのほら吹立く

(九十一オ) 別行。

水の面おもてに朝餌あそにあさる都鳥つ。ぱつと立たる羽音に。驚おどき何事なにやらんと。見みやれは小舟こぶねに。棹ささす女をノウそれ成なりは我君わがきみを。松井源五殿まついげんごではないか。ヤア源五濞町殿せいちやうかとかけよつて。苦くるおしのけいざ先は是こゝへと源五げんごが悦よろこび。濞町諸共せいちやう吉田少将きちだしょう。舟ふねよりあがらせ給たまひければ。

御台所ごだいじよをお米こめが伴ともひかけ来きり。ソウ我君わがきみ様か。我夫わがまかいな。敵たかよりのせんぎさびしく。浅草寺あさくさじに有あるにもあられず。源五げんごのかたへと心こゝろざし是迄こゝ参まゐり侍まつふと。御夫婦ごふう互たがひいにすがり尽つせぬ。悦よろこび涙なみだの折をこそ有あり。

斑女まだら御前ごまへを肩かたにかけ。息いきを切きつて豆蔵まめくら馳かけ付つけ。あれなる川辺かわべにて斑女まだら様。身みを投なんとしたまひし所ところへ参まゐり合せ。是こゝへ御供仕ごくしると。申上まへればヤア源五いかに斑女まだら。先達まへて松若丸まつわがらに廻まわり合あはしと聞きつるに。命いのちを捨するとはいかなる所存しよぜんと尋たずね給たまへは。わつと計はかりに泣出なみだしさればいな。けさ源五殿げんごのるすの間に。是こゝは此様な書置かき置きキ残のこして。(九十一ウ) 松若丸まつわがらの家出いっでしやつたれば。とうも君きみに。申訳まへわけが立ぬによつて我身わがみのかくごと。語かたりもあへず歎なげるれば。

松井まついは一通いっとうおしひらき。何々なに。わらはが家出いっでは兼あてより出家いっでの願ねがひ。兄梅若殿あにうめわがらの御為ごためにと。読よみもあへぬにヤア兄あにの為ために出家いっでとは。もしもや梅若うめわがら空くしく成なりしか氣遣きぢし。いかにいかにと有あれば。

イヤ其儀そのぎはと。源五げんご兄弟あについで打明うちあり得えないはぬ。心こゝろをさつし桔梗ききやうの前取まへ繕つくろひ。行衛いっでのしれぬ梅若うめわがらを。死した様に氣きにかゝる事こと計はかとの給たまへば。源五げんご心こゝろへア、いかにいかにもく。松若君まつわがらの御出家ごいっではふつとした出来心いっで。日外いっでより此隅田このすみだの川向かわむかひいに。始はじつたる大念仏だいねんぶつ。去年三月こゝろ。人かいの手に懸かり。死したる人のしるしに立たし柳やなぎのさし木き。一年いっでも立たやた、ずに。アレいっでく御ごらん候ごうへあのご

とく。生延しせいひ枝にたいこと鉦鼓しやうこをかけ置おキ。ゆき、の人の手向てむかひの念仏ねんぶつ。かねてより帰依きゐあれば。大かたあれにござなされんと申まをせは少将せうじやう。ヲ、しからば我われは松若まつわがを（九十二オ）尋行じんぎやうん。かゝる墓所むしよへは恐おそし有あと守袋まもぶくろを取と出し。此内このうちにこめ置おたるは柳葉やなぎはこじより給たまはつたる。右大将みぎだいじやうついたうの御りんし也と。みだい所に渡わたさるれば。涙なみだと共に受取うけとりて自らも松若まつわがを尋たずがてら。あの塚つかへも詣もたし。一所ひとこにつれて給たまれと。梅若うめわがの御墓所みはかをしたはせ給たまふ心根こころねを。思おもひやりて誰たれしも忍涙しのなみだにかきくるゝ。然しかル所ところへおかざき金五かねご。大息おほいきついでかけ来きり。ヤア詞源五げんご。君の迎むかひに此所このところへ来きられし跡あとへ。敵右大将たかみぎだいじやうより大せいを以もつて逆寄さかよにすだ村むらへおしよせ。降寂院かふじやくいんが手てせい一味いまいの諸士しよしも。防ぶせきかねて危あやしく。夜討よつうの催もよほしハルろけんの上うへは。一ト先君せんきんは何方どこへも御忍ごしのとと言捨ことばて引ひかへせば。

豆蔵まめざうつ、立た。拙者せつしやめはかのちへかけ付つけいで一防いちぼうキと。すだ村むらさしてかけ出す。

源五げんごはつと心付こころづキ。イヤ詞のふ豆蔵まめざうがつまと母ははは。此辺このへにて見知みちり有あル人々ひとびと。御供ごきう召よれてはけつく君のお為ためにならぬ。いづくへ成共なりとも早はやのかれよと。いふにお米こめは濛町もうちやう伴ばんひ。一まづ其場そのばを立たかへる。

少将せうじやう御夫ごぶ婦斑ふま女諸によしよ共御舟ごみづなに（九十二ウ）召よるれば。

川の面おもてにもれゐる鷗う。ながる、経木きやうぎをひつくはへ飛とかふはづみに。ひらくく舟ふねへおとせば。

少将取上せうじやうとけあて。ヤア詞此経木このきやうぎに俗名ぞくな吉田きちだ梅若丸うめわがまる。ほだいの為ためと書記かきしるせしはこはいかに。はつと計うらに顔色かほいろかはり。

ハ、くく。我子わがこの梅若うめわが。古郷ふるきやうをしたふて都鳥みやとと。成なしか可愛かほや。我われは白しろらさぎ孔雀くわんこか鶴つるか。つるくくてん。てんとたま

らぬ親おやの心の歎なげキを紛まらす。此三味線このさんまいせんと舟底ふねぞこより取出とし。是こゝは先まだつ花子はなこが形見かたみ。経木きやうぎは梅若うめわが。恋こし床とこしと両手りやうてに持もて。

物狂しく成給ふ。

情なやお心が乱レしかと。源五がきもせい。みだい斑女もせいしかねておはする所へ。右大将が郎等内記左衛門。たゞ一人かけ来り。ヤア見付た。吉田ノ少将けらいの源五。うぬが手下タの奴原にすだ村にて切立られ。思はず爰へ来しはげの高名。少将が首取て手柄にすると切てか、れは。さしつたりと渡り合。手練の源五に切立られて内記左衛門。叶ぬ赦せと一走に。ほかけてにぐれはいづく迄もとおふて行。おいてははげしく帆なしに舟は。流れ渡りに向の。さしへと三重（九十三才）

物ぐるひ男すみだ川

実や人の親の。心はやみにあらね共。子に迷てや。狂らん。うはの空なる。川風に。ア、サテ。柳の枝は。招くか笑ふか。ハ、くく。我思ひ子と。我恋人の此世を。早く先立しを。聞てくるふがおかしいと笑ふぞ。憎や。情しらずの人心。人商人の手にかけてまだき蒼の梅若を。殺されしとは。誠か本ンか。無常の風にちりく。ちつてはかなき花子が形見の此三味線。いとしくと。いひかはしたる。夫婦親子の四鳥の別。是なれや、くくア不便やなと。か、か。恋しとしたいつらんにかはいや床し。なつかしの。いざ事とはん。都鳥我。思ふ人は有やなしやとよれば。おそればらくばつと。波をけたて、。月は隅田の川水に。うつれる影を。狂する。（九十三ウ）エ、恨はつきじ思ふ敵の大将こそ。ひくなさもし、のがさじやらじかへせ。戻せと。飛たつ鳥をおい廻り。く狂イ乱しておはします。御跡したふて桔梗の前。斑女諸共走り奇。ノウ正だいなやお心をしづめてたべと。袖や袂にすがり。歎クを。ふりはなし。物にくるふが悲しひとや。花子が事を。思ひくらせば狂がむりか。恋とぎりとの。ふたへ帯。むすぶ契りもついた事じやないはいの。わしに詞をかはさじと。

文字が。読ぬとす。ふみさへ戻す。そなた。花子じやないかいの。かはいらしく。文字が読メぬとす。文さへ戻す。そなた。
花子じやないかいの。かはいらしく。情なや誰レ有ふ吉田ノ少将惟貞卿迎は。君の御覚めでたく。世に
も人にも用られ給ひしお身の。うつ、なやとせいすれば。ア、それよ。過し。廓（九十四才）の大寄に外八もんじの道中姿
めつきで殺す。しよていになづも糸よりほそき。こしをしむれはじつ。たんと猶いとし。いとしにやきり、んのふきり、ん
く限りなふいとし我子の。けふの忌日をうら盆と。手向のかゝい踊れくと。そゝろ調子にひく三味線の。いと涙に一
踊り。むざんなる子の亡跡は。アレあの柳のこのもと、。しろし召れぬ痛しや。枝にたいこと鉦鼓かけしはいづくの人の。
手向草いざ我レ々も念仏申てゑかうをせんと。太鼓取々立ならべは。ホ、出来たくと少将も鉦鼓おつ取。ねぶつの拍子は三
人一致に。一色二香むひ中尊は金持チ大尽。観音せいしの幫閑。死だ花子を憐ミ給へ。九品の浄土は九軒のあげや。七日
くのものん日ひがらをどこへ出る事ぞ。葬頭河の鴛子の。うばにせがまれて。かはいや（九十四ウ）たんとくらうするで
ある。浄婆城の曙に朝込ミ姿でしやなくく。東門口に出迎フて。嚙かし我レを待わびん。めいどもしやばも。皆濡
の世と。悟れはつみも。なかりけり。光明遍照。十方せかいの色と情のたいこと鉦声もしどろになむあみた仏。それ。みだ
の誓は一さい衆生を心隔ず救が本願ふうふの中も。心隔ず心の外の恋路はしがち。とかく勤メの其内は。実といふのも
皆浮気。うはきといふも逢とぐれば皆。しんじつに成た所が即心成仏。ほれるは順縁。そゝるは逆縁。順逆別なく。退
も逢のも法心法性既。おきてはゆつうの念仏かんくからり。たいこはと、とん頓證ほだい。瀬々の波音ト我子の声かと
川の上ミ下モあなたこなたと走くて。つかく塚のまねく柳にしたひ寄り。梅若床し花子恋しと声泣キからし。鉦鼓を

枕まくらに伏うつ給たまふはいたはし。くも又哀也。(九十五オ)

涙なみだの隙ひまよりみだみだい所。けさ自みづからに渡わたし給たまひし御ごりんし。是ここそはよき御ご守まもり。斑いば女にょ諸しよ共ども立たよつて。額ひたいにあつれば少せう将しやうむつくと起おきさせ給たまひ忽たちまち本ほん気き人心じんしん地ぢ。ノウ嬉うれしやとくよりも。此こ御ごりんしを戴いたせまかす心こころも付つず。けさよりも梅うめ若わ花はな子を恋こし床とこしと。物ものぐるはしき御ご身みよりそばに付つきそふ我われ々が。悲かなしさを推お量りあれと語かたりもあへず。歎なげく二人を少せう将しやうせいして。是こ偏ひとへに十じふ善ぜん天子てんしの御ご守まもりと。謹つしんでおしいたゞき。夜よに入いるまで隅ぐも田でん村むらへ向むかひし源げん五ご豆まめ蔵くら。両りやう人にんがしらせなきはふしんくくと夕ゆふ間ま暮くれ。柳やなぎの陰かげより申まを父ちち上かみ母はは上かみと。稚わかこはねに三さん人にんははつと驚おどき。梅うめ若わが父ちち母はは恋こしと思おもひの余あまり。ふたゝび此こ途みちへ形かたちチを躰あたまし出でたるかと。すがり付つく歎なげき給たまへは

ア、是こ申まを。私わがは幽ゆう霊れいではござりませぬ。ヤアそれでも物ものいひかつかう。梅うめ若わ丸まるに生なきうつしと。夜よかけにすかし(九十五ウ)みだみだい所。斑いば女にょ御ご前まへは手てを打うて。エ、イ是こが尋たずる我われ子の松まつ若わじやはいなあと。いふに御ご夫おとこ婦めかけ二に度どびつくり。兄あにのほだほだいいに出家しゆつを望のぞむ松まつ若わ丸まる。白しろ装しょう束そくは聞きへしが何なにとしてさつきにから。それと名な乗のりて出でやらなんだと。尋たず給たまへは松まつ若わ君きみ。けさ程ほどより此こ川かわ上かみで。経けい木ぼく千せん枚まいに水みづたむけ。たつた今いま此こ所ところへ帰かへりました。ヤア然しからば今いま朝あさ此こ少せう将しやうが手てに入いり。梅うめ若わほだほだいと記しるしたる。経けい木ぼくは松まつ若わそちが手て跡あとで有あるか。此こごとく親おや子を一所いしょに。引ひ合あするも亡なき梅うめ若わが導みちびきと。皆みな々々御ご墓ぼに打う向むかひ涙なみだながらに御ごあかう有あるか、る所ところへ高たかノ武ぶ者もの之の介かゐ大だい息いきついで駈はせ来きり。扱あも降くだ寂じやく院いん松しょう井い源げん五ごか謀まにて。昼ひるの間まは打う負おたる体ていにもてなし続つづきが原はら迄いたりおびき出でし。伏ふ勢せいを以もつて前後ぜんごよりおし包つみ。主しゆ人にん右みぎ大だい将しやう一いつ族ぞくの大だいぜい。時ときの間まに敗は北きたいたし候まをと言い上あすれば。

ヤア心こころへぬ武ぶ者もの之の介かゐが注ちゆう進しん。此こ少せう将しやうを討うとらん計けい略りやくなるか。アッア全ぜんク左さ様さまの事ことにあら(九十六オ)ず。三さん鳥とりの宿しゆくにおいて。

御しうと柳葉こじを助け奉りし事は。みだい所よつく御存じ此所に一字を建立し梅若殿の御ぼだいを。弔はん心底はかくの
通りと。指添ぬいて髻ふつ、と切払ひ。何とそ是にて御疑イをはらされ。悪人ながらも主君親平の命を御助け下されかし
と。いふ間程なく凱歌つくつて降寂院。右大将を高手にいましめ。引立来れば源五豆蔵両人は。蔵人内記に繩をかけ追立
く。金五を始め一味の諸士残す御前に詰かけたり。

少将甚御悦喜有。武者之介が望に任せん。急ぎ親平が髻払ふべし。源五豆蔵承り。蔵人内記
が首ちうに打おとす。忽ちほつきの右大将心のにごり隅田川。梅若丸は彼岸にしろしはびこる柳のみどり。松若丸の齡久
敷キおんあひいもせ。忠臣の道も豊に都入。よろづ吉田のはんゑい斑女が簀の年千秋。樂とぞ祝しける(九十六ウ)

右俳優曲調者以通俗為要

故隨物聞字正字俗字各為

用捨而文句明也且予自加

墨譜誠為正本云余

豊竹越前少掾(印)

正本屋

大坂心齋橋本四町目西側 九左衛門

(裏見返)